

prologue



プロローグ

古今東西、お姫様は一目惚れが多すぎると思う。

シンデレラも白雪姫も人魚姫も親指姫も眠れる森の美女も、果てはジュリエットに至るまで、有名なお姫様の多くが初対面で恋に落ちていく。

いきなり惚れて、完全に胸を撃ち抜かれて、『これは運命の出会いだわ！』みたいなノリで盛り上がって、交際期間なんかゼロで相手のプロポーズを受け入れちゃう。なんだよ、結局顔が全てなのか？ それとも王子様という立場か？ 金と権力を持つ美形が最強ってオチなのか？ そうなのか？

お姫様だけではない。

王子様だって大概だ。

顔見ただけで惚れて、『おお、なんと美しい娘だ、私の妻としよう』みたいなテンションで盛り上がって、交際期間なんかゼロで相手にプロポーズしちゃう。中には相手の寝顔を見ただけで惚れる猛者もある。やれやれ、所詮女も顔ってことかよ。顔と若さが女の全てってオチなのか？

とにもかくにも、全体的にスピード婚だ。超速攻でゴールインして、その後二人はいつまでも幸せに暮らしましたとき、なんて締めめの文句で終わる。パッドエンドのロミジュリにしたって、全体を通して二週間ちよいといつかの巻き展開。

現代のハーレムラブコメの中には『なぜヒロインが主人公に惚れたのかわからない』なんて叩かれる作品もあるけれど、個人的に言わせてもらえば、その手の突っ込みはむしろ古典文学の方にいれるべきだろう。

わかんねえ。

お姫様が、王子様が、なんで相手に惚れたのかわかんねえ。

『一目惚れ』という、最高の便利な言い訳で全てを片付けてんじゃねえよ。

とか。

まあ。

そんな風にひねくれた指摘をして悦に浸っていたのが、彼女と会おう前の俺だった。

今となっては——実際に『一目惚れ』を経験してしまった今となっては、考えが一八〇度変わった。手のひらクルクルだ。一目惚れは実在する。古今東西のお姫様や王子様にも、今ならば感情移入できる。イギリスの推理作家が言ったらしい『一目惚れ以外は恋愛ではない』という暴言めいた名言にも、ちよつとばかり納得しそうになってしまう。

あの日、あの瞬間で、俺は一目惚れをした。

いや。

あるいは——一目惚れだったことにしたいのかもしれない。

惚れてしまったからこそ、一目惚れだったことにしたい。好きになったからこそ、最初の出会いが特別なものだったと思ひ込みたい。運命のようなもの感じていたい。二人のなにもかもを神聖視してしまいたい——そんな脳内補正が働いている可能性も否めない。

一目惚れの正体というのは、案外そんなものなのかもしれない。

言ってみれば、恋愛脳が引き起こす自己洗脳。

一目見ただけで惚れるわけではなく、好きになって惚れてから、『思い返してみれば初めて会ったときから、なんか運命的なものを感じていた気がする』と、後になってから自分にとっで都合のいいように記憶が再構築される。そういった後づけやこじつけのことを、人は『一目惚れ』と、そう呼んでいるのかもしれない。

さて。

まあ。

照れ隠しの前置きはこれくらいにして、そろそろ本題へと入ろうか。

まずは、俺達の出会いから。

今になって思い返すと——全ての真相が明らかになってから思い返すと、笑ってしまいましたくなるぐらいに滑稽で奇抜で不思議で、それこそ、お伽噺のような出会いだった。

第一章



昔々あるところに、
大層綺麗なお姫様がおりました。

「……はあ」

月曜日の早朝。

慣れない満員電車の中、俺は小さく溜息を吐いた。

今の時間帯は通勤通学ラッシュと真ん中。俺の乗る駅からでは、座ることはもちろん、吊革すら掴むこともままならない。まあ、吊革を掴めない程度で文句を言っているのは、首都圏に住まう人達に笑われてしまうのかもしれないけれど、東北の地方都市に住む俺の感覚としては、電車＝座って乗るもの、だ。

いつもは二本ぐらい早い電車に乗り、座席に座って優雅な通学タイムを満喫している。月曜日ならば駅前のコンビニでジャンプを買って電車内で読み、そして早く着いた教室でもう一度ゆつくりと、巻末コメントや次週予告までじっくりと読み直すのが、俺のアルティメット・ルーティーン。

しかしそんな習慣は本日、寝坊という大変シンブルな要因で無残に碎け散る。

ぬう。やっぱり漫画なんか読んでないで、早く寝るんだったな。なんで最近の漫画アプリはどれもこれも零時ジャストに更新するんだよ？ 朝起きてから読んだ方がいいとは頭じゃわかってはいるんだけど、ついつい夜更かしをしてみよう。

零時更新の漫画アプリのために夜更かしをし、そのせいで寝坊し、ジャンプを読みそびれてテンションが下がる——それが俺、桃田薫、高校一年生の、五月の日常だった。

ジャンプ・ロスと満員電車によって体力と気力がガンガン削られていく中、電車が一つの駅に停車した。

開いたドアからさらに乗客が入ってきて、俺は車内の奥へ奥へと追いやられてしまう。反対側のドア付近にどうにか自分のスペースを確保した。

そのとき、である。

俺は——一人の女子高生に目を奪われた。

「……………」

綺麗と、かわいいが、同時に心を埋め尽くした。

紺のブレザーに身を包んだ彼女は、ドアの窓から外の景色を眺めている。

真っ白な肌と、整った目鼻立ち。どこか幼さの残る顔立ちながら、長い睫毛や薄く引いたリップが『女』を強く強調する。長く艶やかな黒髪からは清楚な雰囲気が漂うが、今時の女子高生らしく、毛先は軽く遊ばせてあった。

特有の熱気に満ちた満員電車の中で、彼女だけが淡く涼やかな光を纏っているような、そん

な錯覚さえ見えた。

「……っ」

ハッと我に返り、慌てて視線を外の景色に向ける。やべえ、いくらなんでも見すぎた。でも思わず見惚れてしまいうぐらい、綺麗だった。かわいかった。

そして……大きかった。

ブレザーの内側、薄手のニットを押し上げる双丘には、男を一目で狂わす魔力があった。豊かというか、たわわというか。存在自体が性犯罪だと訴えたくなるような、恐ろしくも素晴らしき豊乳。プリーツスカートから伸びる脚は黒いストッキングに包まれ、細すぎず太すぎずという絶妙なバランスを保ち――

って、いや。

ただだけセクシャルな部分に注目してんだよ、俺。朝っぱらからムラムラし過ぎだろ。にしても……妙だな。

あのブレザーは確か、桐凛女学院の制服だったはず。こころじゃ有名な私立のお嬢様高校だ。けどこの電車は、桐女とは反対方向の駅に向かっている。現に彼女以外、桐女の制服を着ている奴は一人もいない。乗り間違えならどこかで降りているだろうし……となると、なにか忘れ物でもしたのだろうか。

妙な違和感を覚えて、俺は再び彼女を見やる。そう、違和感だ。決して性欲からではない。

電車の揺れに合わせて揺れるたわわな果実を運良く見たいなんて微塵も思っちゃいない。ちらりと、視線だけを横に動かして――そして気づく。

彼女が、真つ青な顔をしていたことに。

体調不良ではない、と直感的に思った。なぜなら彼女はその端正な顔を、恐怖に引きつらさせていたから。引き結んだ唇は小さく震え、脇に下げた手はプリーツスカートを、不格好なシワがでるほど強く握り締めている。

その理由はすぐにわかった。

「……っ」

痴漢。

俺の目が捉えたのは、リアルタイムで行われる痴漢の光景だった。

女子高生の臀部を、混雑に紛れて馴れ馴れしく撫でる手。

その手は、彼女の背後に立つ男から伸びている。眼鏡をかけたサラリーマン風の男。一見すると真面目そうな風体で、とても性犯罪をする奴には見えない。しかし手つきは洗みなく、顔は平静そのもの。もう片方の手ではスマホを操作する隠蔽工作。

ずいぶんと慣れた様子である。

おいおい、マジかよ……。

朝っぱらからなにやっつてんだ。

ああ、いや、痴漢って意外と朝が多いんだっけ？

無抵抗の美少女に卑劣な魔手が迫る光景。腹の底から義憤にも似た思いが湧き上がるが、しかし初めて遭遇した異常なシチュに、頭の方がパニックってしまう。

ど、どうしよ……？

見てしまった以上無視はできない。なにより彼女をこれ以上放つてはおけない。助けない。でも、どうすれば……。ここで下手な騒ぎを起こしても彼女のためにならないかもしれない。きちんと犯罪として立証するためには、冷静に証拠写真でも撮った方がいいのか——などと必死に考えていたとき。

彼女がこちらを見た。

目が合う。

涙に潤む瞳に見つめられた瞬間——あらゆる計算が頭から消えた。

考えるより先に体が動く。

「——おいっ！」

強引に人混みを掻き分けて足を踏み出し、サラリーマン風の男の手を掴んだ。「ひっ、なっ」と悲鳴にも似た声が男の口から上がる。

「なにやってんだよ、てめえ」

恐怖を必死に押し殺し、できる限り凄んでみせる。本当はかなり怖い。相手がいきなり逆上

してきたらと思うと、足が震えそうになる。

本当の俺は皆動賞を目指している真面目な優等生（帰宅部）のだけれど、相手を威圧するため、必死に不良っぽい演技をしてみせる。

グッ、と相手の腕を荒々しく掴み上げる。

辛いなことに相手の男は華奢で、俺よりも背が低かった。

「な、なんだ、きみは!? いきなり、なにをするんだ……？」

「とぼけんじゃねえよ。てめえ、さっさからずっと——」

そこでふと、彼女の顔が目に入った。恐怖と驚愕に歪んだ、今にも泣き出しそうな顔。ああ、やってしまった。安易に行動すべきじゃなかった。

俺が騒ぎ立ててしまったせいで、周囲から奇異の視線が集まっている。「なになに?」「痴漢だつてさ」「痴漢!?マジで!?」「ウケるんだけど」「誰? 誰がやったの?」「勘違いじゃねえの? 最近、痴漢の冤罪増えてるらしいし」「自意識過剰な女つてやだねー」「興味本位の視線と声が車両内で大氾濫。スマホのカメラを向けてくる奴までいる。

これじゃ痴漢を捕まえたところで、彼女も一緒に晒し者になってしまう。くそ。どうすればいい。どうすれば。

必死に考え抜いた末に俺は、

「——ず、ずっと、俺のケツを触ってたじゃねえかよ!」

と叫んだ。

加害者である男も、被害者の彼女も、ポカンとした。

周囲にも変な空気が流れ、やがて失笑めいた笑いが漏れる。「え、嘘うそつ。男が痴漢されたの?」「それって痴漢じゃなくて痴女じゃね?」「いや、男が男に触ったみたいだよ」「ウケるんだけど」「まあ恋愛は自由だし」猛烈な羞恥しゆうちがこみ上げてくる。

けど、今更後に引くわけにはいかない！
押し通せ！

「ま、まったく……朝っぱらから盛ってんじゃねえよ。いくら俺のケツが、つい触りたくなるぐらいキュートだったからってさ!」

「な、なにを言ってるんだ……? 私に男になんか——いたつ」

腕を強く掴み反論を止める。いやいや頼むよサラリーマン風のおっさん! 頼むから話合わせろ! あんただって痴漢で訴えられるよっか、スキンシップが激しいおっさんと勘違いされる方がまだマシだろ! 事を荒立てたくねえんだよ! 見逃してやるから空気を読んでくれマジで!

そんな俺の必死のアイコンタクトが通じたのか……はたまた、必死過ぎる形相にビビったのか、相手の男は完全に沈黙してしまう。

「ふんつ。二度とすんじゃねえぞ!」

強く言い切り、俺は元の位置に戻って窓の外を覗む。……後ろを見る勇氣はない。ザワザワ、

ザワザワ。あーあ、みんなが俺の話をしてるよお。

電車が次の駅に止まると、加害者の男は逃げるように電車から降りた。けど、残念ながらも俺の降りる駅ではない。メチャクチャ降りたいけど、ここで降りたら遅刻確定なので皆勤賞のために耐える。

相手がいなくなつたせいで、周囲の興味は俺に集中する。次から次へと伝言ゲームが繰り返され、いつしか「あいつあいつ、なんか、あの男子が痴漢をしたみたい」とか言っちゃう奴まで現れる始末だ。衆愚しゆぐって怖いね……。

結局、降りる駅に到着するまでの十分間、俺は無責任な興味の集中砲火を食らうハメとなる。下世話なヒソヒソ話には心底辟易へきえきしたけれど——でも、彼女が痴漢に遭ったことには誰も気づいていないようで、それだけはやかったと思つた。

終点の駅に到着した後、俺は逃げるように電車を降り、改札を小走りで抜けた。

はあ。噂うわさになつたらどうしよう?

さっきの車両には同じ学校の奴も結構乗っていた気がする。常識ないバカが俺の写真をインスタとかに上げてたりして……あー、終わったかもなあ、俺の高校生活。

憂鬱ゆううつに押し潰つぶされそうになりながら、歩く速度を緩めたとき、

「——ま、待って！ 待ってくださいっ！」
背後から声をかけられた。足を止めて振り返ると、さつき痴漢の被害に遭っていた女子高生が走ってくる場所だった。

「はあ、はあ、よ、よかった……間に合った」

彼女は両手を膝につつき、呼吸を整える。前かがみになったせいで、意識したわけではないのだろうけど、豊かな胸部が一層強調される形になった。

やべえな。改めて正面から見ると、本当にデカイし……本当にかわいい。

髪はサラサラで目鼻立ちもくつきり。化粧も、いわゆるナチュラルメイクというやつなんだろう、変に濃すぎたりすることもなく、実に自然な美しさに仕上がっている。制服は全体的にややサイズが小さいようで、それがまた彼女の肉感的な体型を強調する。

美少女といっても、学校にいるただ見た目が綺麗な少女とは少し違う気がした。

色気というのかなんというのか……とにかく、そこら辺の女子高生には出せない、どこか大人びた雰囲気を感じる。

「あ、あのっ、さつきは本当にありがとうございました！」

息を整えた後、彼女は深々と頭を下げた。

「私……本当に、怖くて怖くて……どうしたらいいか、わかんなくなっちゃって。きみのおかげで本当に助かった。ありがとう。あと……迷惑をかけてしまって、ごめんなさい」



「いや、べ、別に……」

言い淀む俺。

あんまり丁寧にお礼や謝罪を言われてしまうと、こちらも恐縮してしまう。

「大したこと、してないっすよ。つーか……俺の方こそ、すみません。本当はあの男のこと、車掌が駅員さんに突き出した方がよかったと思うんですけど」

本来はそうすべきなのだろう。罪に正しい罰を与えるためには——痴漢に正しい社会的制裁を与えるためには、罪を明らかにして法で裁かせるべきなのだ。

けれど俺は、俺の勝手な判断で、奴の罪を誤魔化してしまった。

「そんなっ。謝らないでよっ！」

俺の謝罪を、彼女は強い声で否定した。

「私が恥をかかないように、自分が被害に遭ったことにくれたんだよね？」

「……まあ」

「ごめんね。私のせいで、恥ずかしい思いさせちゃって」

「き、気にしないでください。俺が勝手にやったことだから」

「……ありがとう。きみに助けてもらえて、本当によかった」

潤んだ目を細めて、朗らかに微笑む。

俺は照れくさくなって、つい顔を逸らしてしまう。

「あつ。大変、もうこんな時間っ」

駅ビルの外壁にある時計を見て、彼女が慌てた様子で叫ぶ。時刻はすでに八時を回っている。これからお互い、それぞれの学校に向かわなければならぬ。

彼女とは、ここで別れたらたぶんもうこれっきり——そう思った瞬間、どうしようもない喪失感に襲われた。

もつと話したい。また会いたい。そう思ってしまう俺がいる。

ど、どうしよう……。

これは、連絡先とか聞いてちゃっていい流れなのか？ いやでも迷惑かもしれないし、てかこのタイミングで聞いたら、『痴漢から助けてやったんだから連絡先ぐらい教えろよ』と恩にさせてみたいだな。たとえ内心じゃ嫌がってても負い目から教えてくれそうで、だからこそ聞きづらい……いやでもやっぱり——

などと、考え過ぎるぐらい考え過ぎてしまい、俺が一步を踏み出せずにいると、

「あ、あのっ」

緊張で裏返ったような声で、彼女が口を開いた。

見れば、色白だった頬が真っ赤に染まっている。

「よ、よかったら……連絡先、教えてもらえないかな……？」

後半はボソボソと消え入るような声。俺は目をパチクリさせてしまう。

「えっと……その、今日のこと、また改めて、ちゃんとお礼がしたいから……。ダ、ダメなら全然大丈夫だけどっ」

「ダ、ダメじゃないです！ 喜んで教えます！」

お互いにスマホを取り出し、ラインIDを交換する。

「桃田薫、くんでいいのかな？」

連絡先の交換が終わった後、彼女がスマホの画面を見ながら呟いた。「はい」と頷いて俺もまた、自分の画面を見る。どうやら彼女も俺と同じく、本名でラインを使っているタイプのようだった。

ようやく彼女の名前を知ることができた。

「織原、姫、さんですか？」

「……はい」

確認すると彼女——織原さんは恥ずかしそうに頷いた。

「あ、あははー。な、なんか恥ずかしいよね、姫だなんてさ。小さい頃ならかわいい名前なんだろうけど、この年になるともう——」

「いや」

俺は言う。

自分でも、どうしてこんな台詞を言ってしまったのかは、わからない。

「びつたりだと思えます……よ」

「……っ。そ、そんな、やだっ。もう、なに言ってる……うう」

織原さんの顔がみるみる赤くなっていく。俺もきつと似たような顔色になってるんだろう。恥ずかしくて照れくさくて、どうにかなくなってしまいたいそうだった。

「……あ、ありがと、桃田くん」

ぼつりとそう言っ、織原さんは嬉しそうに恥ずかしそうに微笑む。その笑顔があまりにも眩しくて、俺は胸が締め付けられるように痛んだ。

痛みの正体は、まだわからなかった。



「……好きな女ができた？ ちっ。死ぬばいいのに」

友人である浦野泉の反応は、予想取り辛辣だった。

昼休み。

俺はいつものように空き教室の一つで、ウラと二人で昼食を食べていた。俺達他には誰もいない。高校に入って一ヶ月。昼休みの教室は、リア充というのかパリピというのか、とにかく社会的で賑やかな連中の空間と成り果てている。

俺はどうにもそういった空気には馴染めず、校舎の端っこの方にある空き教室までわざわざやってきて、気の置けない友人と昼食を取ることにしていた。

「す、好きだなんて言っただろ。ただ……気になるっつか、なんっつか。あくまで、好きになったかもしれないという可能性の話をしてるだけであって……」

「キメえな。デカイ図体してるくせに女々しいこと言うなよ。この、裏切り者が」

「裏切り者って……意味わかんねえな。なにが裏切りなんだよ？」

「モモだけは僕を裏切らないと思っただのに……」

長い前髪から覗く目に、呪いと憎しみの感情を滾らせるウラ。

「青春だの恋愛だのという欺瞞に満ち満ちた幻想に騙されることなく、共に気高き陰キャ道を歩んでいけると思っていたのに」

「……なんだよ、陰キャ道って」

「思い出せよ、モモ。中学時代、クリスマスやバレンタインといったクソみてえなイベントの日には、いつも僕と一緒に世界を呪っただろ？ 企業戦略に踊らされる頭の足りないバカ共を嘲笑の的として、一緒に美味しい酒を飲んだだろ？」

「やめろ、ウラ。黒歴史を掘り起こすな。俺はもう、そういうのは中学で卒業したんだよ。高校じゃ普通に彼女とか作りてえんだ」

そして酒は飲んでない。飲んだのはシャンメリーだ。男一人で世界を呪いながらシャンメリーを飲むようなクリスマスは、もうたくさんなんだよ、俺は。

「けっ。所詮はお前も、恋愛とかいう愚かな価値観に溺れる凡愚の一人かよ。モモなんか嫌いだ。あつち行け、バーカ。性病で死んじゃえ」

ウラは拗ねたように顔を背け、野菜ジュースから伸びるストローに口をつけた。俺は溜息をつく他ない。

浦野泉。

背は低く、体つきも華奢。よく見ると結構整った顔をしているのだけど、その全てを台無しにするボサボサの髪と、死んだ魚のように生気がない眼。暗黒の双眸は時々輝くこともあるけど、それは大体リア充の不幸を『ザマアアア！』と嘲笑するときだ。

俺とは小学生の頃からの腐れ縁だ。

あと一人の男を加えて、三人でツルむことが多かった。

ウラこと浦野泉は、小さい頃は割と快活で明るくて、クラスのリーダー的存在になるような子供だったんだけど、天国のように地獄だった中学時代を経て、このような陰キャの中の陰キャと成り果ててしまった。

「だいたい、なんだよ、電車で痴漢に遭ってたとこ助けるってさ。漫画かよ」

「しょうがねえだろ。実際そんな事態に遭遇しちまったんだから」

「ふん。どうせその桐女の女子も、偏差値の低さと比例するような短い丈のスカート穿いて、

女をアピールしてたんたる？ ヤリマンだよ、ヤリマン。ピッチ確定。男を誘うような格好してるから痴漢なんか遭って——」

「おい」

自分でも驚くくらい、低い声が出てしまった。織原さんを悪く言われたことで、苛立ちにも似た感情を抱いてしまっている俺がいた。たぶん、睨むようにしてしまったのだろう。ウラは「ひいつ」と間拔けな声を上げ、椅子から転げ落ちそうになっていた。

「な、なんだよお……ぼ、暴力か!? 暴力に訴えるのか!? 手を出すってことは、口では僕に勝てないと思えたってことだからな! はい、僕の勝ち! 論破! 論破!」

「……落ち着けて。なんもしねえから」

基本的に死ぬほど気が弱いんだよなあ、こいつ。親しい奴にはすげえ口悪くて横柄な態度に出るけど、本当は気が小さくて人見知り。クラスでもいつも一人で、所在なざげにポツンと佇んでいる。隣のクラスの俺が遊びに行くと、「な、なにに来たんだよ、この野郎っ」とニコニコしながらダツシユで寄ってくる。まあ、かわいい奴なのだ。

「……で、どうすんだよ、モモ」

落ち着きを取り戻したウラが、椅子に座り直して問うてくる。

「その女と……付き合うのか?」

「いや、気が早えよ。まだ連絡先交換しただけだから」

「んじゃ、どうすんだよ?」

「だから……それをお前に相談してるんじゃねえか」

運よく連絡先は手に入れることはできた。しかし……恋愛経験の乏しい俺にはここからどうしたらいいか、全くわからない。こっちからすぐに連絡を取るべきなのか、それとも相手からの連絡を待つべきなのか。

「なるほど。じゃあ一つ、いいアドバイスをやるう——相談する相手を間違っている」

「わかってるわ、んなこと」

俺と同じ……いや、俺以上に死んだ学生生活を歩んできたこいつに、恋愛の駆け引きや機微などは一切わからないだろう。恋愛経験なんて二次元でしか積んでない奴だからな。

「この手の相談は、僕じゃなくてカナの奴にしろよ」

「まあ、俺もそう思ったんだけど……あいつに相談したら、すげえ高い次元でのアドバイスをしてきそうじゃん?」

「んー、確かに。『え? 普通に連絡すればいいんじゃない? 普通に』とか言いそう」

「だからひとまず、底辺のお前に話を聞いてもらおうかと思って」

「あー、なるほどねえ……って誰が底辺だコラ」

軽くツッコんでから、ウラは思案顔となる。

「あー、んー……よくわかんねえけど、待ってたらいいんじゃないかねえの? 一応、モモが恩人で、

あつちがお礼するつて言つてたんだろ？ だったらきつと、向こうのタイミングで連絡が来んだろ」

「そ、そうなんだけど……やっぱこういうときは、こつちから連絡する方が男らしいような気もするだろ？ ひとまず、先に挨拶ぐらいいはしておいた方がいいかなって」

「んじゃ、そうすれば」

「だ、だけど……がつついてるようになるのも嫌でさ。痴漢から助けたことを利用してマウン卜取るような真似だけは絶対したくなくって……」

「……クソ面倒くせえな。これが童貞という生き物か」

唾棄するように言いやがった。いやお前も童貞だろうが。中二か中三のクリスマスに、『生涯童貞同盟』とかいう、アホみたいな同盟組んで二人で盛り上がっただろ。

「つたく、連絡先が交換できたぐらいで舞い上がりすぎなんだよ、モモは。相手の女は、たぶん今頃急に冷めてるとこだよ。『はあーあ、一応、社交辞令でお礼するとか言っちゃったけど、やっぱメンドいなあ。もう放置しちゃお』とか、そんな風に思つて——」

と、そこで。

テーブルの上に置いておいた俺のスマホがブルブルと震えた。ラインの着信を知らせる振動だ。シュバツ、とひつたくるような動きでスマホを取る俺。

メッセージの送り主には——織原姫と表示されていた。

「『こんにちは。昼食時に失礼します』という、女子高生とは思えないほど堅い挨拶に始まり、再度丁寧^{ていねい}に朝のお礼を述べられた後——本題が始まった。

『今朝のお礼をしたので、もしよければ明日の放課後、会つてもらえますか？』

その文章を読んだ俺は、きつと大層気持ち悪い顔となつていたことだろう。横にいたウラが心底不機嫌そうな顔になつて舌打ちし、「……死ねばいいのに」と呟いた。

翌日の放課後。

待ち合わせ場所は、向こうの希望で駅ビル前の広場となった。

俺は遅れてはならないと三十分前に到着し、夕暮れに染まる街並みの中、行き交う人々を眺めながら相手の到着を待つ。

……情けないぐらいにそわそわしてしまう。ポケットから無駄に何度もスマホを出し入れしたり、駅ビル入り口のガラス扉を鏡にして身だしなみや髪型を直したり。あー、クソ。髪型が全然決まらない。美容院にでも行つとくんだったかな。

やがて二十五分後、つまり待ち合わせ時間の五分前に、織原さんは現れた。

昨日と同じ、桐女のブレザー姿。俺の姿を見かけると小走りでやってくる。

「ごめん、桃田くん。もしかして待たせちゃった？」

「い、いえ。俺も、今来たところです」

定番の台詞を言ってみる。本当は結構待っている。三十分には到着していたし、その前にも本屋やゲーム屋を回って時間を潰していた。

待ち合わせの時間が五時半という、帰宅部の俺には中途半端な時間だったため、一回帰ることもできず、駅前で適当に時間を潰していた。

「……ごめんね、変な時間に呼び出しちゃって。今日はその……い、委員会とかいろいろあつてや」

「大丈夫です。気にしないでください」

「うん……」

そこで会話が途切れてしまう。自分のコミュ力のなさが恨めしい。気の利いたトーク一つ出でこない。お互いに言葉を探すような沈黙の後、織原さんが苦笑気味に口を開く。

「あ、あははー……なんか、緊張しちゃうね」

「そう、ですね」

「昨日、会ったばかりだもんね」

「はい……」

「マ、マジ出だねっ」

「……へ？」

グッと親指を立てて言った織原さんに、俺はポカンとしてしまう。

「え……あ、あれ？　ち、違った？　今時の女子高生は、とりあえずマジ出っていうんじゃないっけ……？　なにかにつけてマジ出って言っつければコミュニケーションが成立するはずじゃ……あれ？　マジ出解だったっけ……？」

顔を真っ赤にして困惑する織原さん。渾身のギャグが滑ったかのような、特大の羞恥を感じている様子だった。

「マジ出……ですか。いやまあ、言う奴は言いますが、俺の周りにはあんまり……」

陽気な友達が少ないので、俺はあまり使わない。

ていうか意味がわからないしな。なんだよ、マジ出って。

「ああつ、もう忘れてっ！　今のなし！　全部なし！」

真っ赤な顔で叫んだ後、織原さんは「んんっ」と失態を誤魔化すように咳払いをし、

「えつと……じゃあ、移動しましょうか」

と告げた。彼女に連れられて辿り着いたのは、駅から少し歩いたところにある、人気のない高架下の公園だった。

ベンチと砂場があるだけの、寂しい公園だ。

うちの高校のテニス部がたまに壁打ちに来ることもあるそうだけど、日が暮れ始めたこの時間帯には、人っ子ひとりいない。

街頭の淡い光に照らされるベンチに、織原さんがスカートを畳みながら腰掛ける。俺ほどの程度間を詰めていいのか考えに考えて、結局、人が一人座れる分ぐらいのスペースを空けて座った。

「じゃあ改めて……昨日は、本当にありがとうございました」

居住まいを正して、織原さんは言う。

「それでね、お礼なんだけど……」

織原さんは持っていたトートバッグから、かわいいデザインの弁当箱を取り出した。

「お、お弁当作ってきちゃいました」

「弁当……ですか」

「め、迷惑、だったかな？ 嫌だったら、私が自分で食べるから無理しなくても……」

「いやっ、メチャクチャ嬉しいです！ ちょうど腹減ってたんで！」

女子の手作り弁当をもらうなんて、人生で初めての経験だ。これで喜ばない男はいないだろう。ああ、まさか俺の人生に、こんな素晴らしいイベントが来ようとは。生きてて本当によかった。

「はあ……よかったあ、喜んでもらえて」

胸に手を当てて、あんど安堵したように息を吐く織原さん。

「お礼をなににしようか、いろいろ考えたんだけどね。物を渡そうにも、男の子が喜ぶものとかよくわかんないし、それに私……ほら、女子高生でお金がないから！ そう、女子高生だからお金がないの！」

早口でまくし立てる。やけにお金がないことと、女子高生であることを強調してきた。

「もう、ほんとに女子高生だから全然お金がなくてね……み巳年だから、お金には困らないなんて言われながら育ったんだけど、全然で」

「巳年……？」

「うん、そうだけど……あれ？ 言わない？ 巳年はお金に困らないって。私、お婆ちゃんか

らよく言われたんだけど」

「それは知ってます。俺も言われたことがありますから」

『いい亥年は猪突猛進』と同じぐらいよく言われる、『み巳年は金に困らない』。冷静に考えると突っ込みどころ満載な言い伝えだけれど、まあ今は流そう。

「言われた……ってことは」

「はい。俺も巳年です」

「そ、そうだったんだ」

「偶然ですね。ってことは織原さん、タメだったんですか」

「え……」

「巳年なら、俺と同じで、今高一ですよね?」

「……そ、そうだね。うん、そう……そうなの。そんな気がする。私は、高一。高校一年生の、女子高生……」

まるで今新設定を覚えたかのように、不自然な言い回しをしてくる。まあ同じ巳年でも、早生まれならば一学年上という可能性もあったのだが、どうやらタメで合っていたようだった。

「タメだったんだ。なんか勝手に先輩だと思ってました。織原さん、大人びた雰囲気があるから——」

「嘘っ!？」

唐突に声を荒らげ、顔を近づけてきた。ちょっ。近い。

「や、やっぱり私、老けてる!? JKには見えない!? 無理がある!？」

「え……? いや……」

なにやら切実な様子だった。うーむ。「大人びている」は今時の女子高生には禁句だったのだろうか。褒め言葉のつもりだったんだけど。

「ふ、老けては 아닙니다よ。ただ、落ち着いてて礼儀正しいから、大人っぽいと思ってただけで」「そう……なら、いいんだけど」

はあー、と心の底から安心したように、深々と息を吐く織原さん。

「……どうしたんですか、急に?」

「な、なんでもないなんでもないっ。ほら、細かいことは気にしないで、早く食べてよっ」

焦った声に促されて、俺は弁当箱を開く。

目を腫らす。

正方形の箱に詰められていたのは、サンドイッチと唐揚げ、卵焼き、ベーコンのアスパラ巻き、プチトマト。彩り豊かで実に食欲を唆るラインナップだった。

「い、いただきます」

軽く手を合わせてから、俺はまず唐揚げに狙いを定めた。添えてある可愛らしいピンを手に取り、肉の塊に突き刺して口に運ぶ。

美味っ。

冷めているのに十分美味しい。下味がしっかりと効いているし、衣も水っぽくなってない。噛む度に肉汁が口の中で躍る。続けてサンドイッチに手を伸ばす。うん、こちらも美味だ。具材はハムとチーズとレタスで、パンズにきちんとマーガリンが塗ってある。卵焼きはかなり甘めの味付けで、好みかわかれそうだったけど、俺は大好きな味だった。そう、卵焼きは甘めでいい。ご飯のおかずにならないくらい甘くていい。

「ど、どうかな?」

夢中で食べ続けていた俺に、織原さんが不安そうに聞いてきた。しまった。美味しすぎて

ずっと無言で食べ続けてしまった。

「めっちゃ美味しいです」

「ほんと？ よかったあ」

嬉しそうに破顔する織原さん。

「俺、こんな美味しい弁当、初めて食べました。織原さん、すげえ料理上手ですね」

「や、やだもう、褒めすぎだよ。このぐらい、普通だったっば。私、一人暮らしが長いからさ。節約のために、毎朝自分で自分のお弁当を作ってるから、嫌でも上達して——」

「一人暮らしが長い……？ 織原さん、高一ですよね？」

高校入学と同時に一人暮らしするパターンは割とある気がするけど、まさか中学から一人暮らししていたのだろうか。

「あっ。え、えつとね、あのね……わ、私、家庭が複雑だからっ！」

ふむ。そうか。

家庭が複雑なのか。ならば仕方がない。あまり触れない方がいいだろう。

会話をひとまず中断し、俺は弁当の残りを平らげる。

「ご馳走様でした。本当に、美味しかったです」

「お粗末様でした。ふふ。なんか、いいね、男の子がモリモリ食べてくれるのって」

織原さんは笑しげに笑った後、もじもじと両手を絡めた。

「本当はね、少し緊張したんだよ？ 自分が作った料理、家族以外の男の人に食べてもらうのなんて初めてだったから……」

「そう、なんですか。なんか……光栄ですね。ほんと、美味しかったです。もう、毎日食べたいくらいで——」

ハツと口を噤む。しかし手遅れで、織原さんは頬を赤らめていた。いやいやおいおい、なんてベタな失言してんだよ俺は!?

「あのっ、そんな深い意味じゃなくて！ ただ、そのぐらい美味しかったってことで！」

「わ、わかってる、わかっているから、大丈夫っ！」

お互いにお互いふんふんと手を振る。息を整えた後、織原さんは、

「ありがと。私も桃田くんみたいな子に、毎日食べてもらえたら嬉しいな」

と付け足し、朗らかに微笑んだ。大人びた社交辞令っぽい返しであったけれど、それでも胸が高鳴ってしまう。

そこでふと、彼女の表情に影が落ちる。

「……自分のためだけにご飯作ってるのって、ちょっと寂しいからさ」

儚げで、どこか自嘲めいた笑み。

すでに日は暮れていた。月の光に照らされ、寂しそうに笑う織原さんは、触れれば壊れてしまいそうなほど繊細な空気を纏っていて——矛盾するようだけど、だからこそ思い切り抱き

縮めてしまいたくなかった。

駅へと戻る道では、本当に取り留めもない話をした。

「へー、桃田くん、九月生まれなんだ。春っぽい名字なのに」

「名字は関係ないでしょ。名前ならともかく」

「あはは。それはそうか」

「織原さんは十二月ですか。じゃあ、俺の方が少しお兄さんだったんですね」

「う、うん。そ、そう、なるの、かな……」

本当にどうでもいい話をしながら、並んで歩いて行く。せめてもの男らしさアピールとして、弁当の入ったトートバッグは俺が持つようにした。

うーむ。けど、アレだな。

なんか……敬語やめるタイミング完全に失ったなあ。

最初、完全に先輩だと思って接してたから、タメだとわかっててもなんか敬語にし辛い。向こうから『タメ口でいいよ』とでも言ってくればいいのだけれど……なんというか、今の状態でお互いにすぐくしっくり来ている感じがある。不思議なものだ。

あつという間に駅へと到着してしまう。

「えと、じゃあ、ここでお別れしよっか」

「あの……俺、家まで送ってきましょうか？ だいぶ暗くなってるし」

善意からの申し出——というわけではない。心配なのは本ただけれど、一番の理由はもっと彼女と一緒にいたかったからだ。少しでも、一分でも長く——

しかし、織原さんは首を横に振る。

「ありがとう。でも大丈夫。私、家、近いから」

「……そうですか」

「じゃあ、そろそろ」

「はい……あの」

「うん？」

小さく首を傾げた織原さんに、俺は言う。

「ま、また今度」

もつといくらでも気の利いた台詞せりふはあっただろう。しかし恋愛経験値が底辺の俺には、ありったけの勇気を振り絞っても、この一言が精一杯だった。

織原さんは一瞬面食らったような顔をした後、すぐに優しい笑みを浮かべ、

「うん、またね」

と言ってくれた。胸の奥から言いようのない歓喜がこみ上げてくる。たとえ社交辞令の挨拶

だったとしても——「ワンチャン、行けたら行く」レベルの意味しかない『またね』だったとしても、再会を示唆する別れの挨拶が、とにかく嬉しかった。

織原さんは軽く手を振り、人混みの中に去っていく。俺は彼女の背中が見えなくなるまで、沸騰したような頭でぼーっと見つめていた。

「……はあ、帰るか」

一人眩いてから、家の方へ向かう電車の乗り場へと向かう。なんだか、夢から覚めた気分だ。織原さんみたいに綺麗な人が俺のために弁当を作ってくれたなんて、本当にもう夢かしら思えない。

でも、確かな現実だ。

だってその証拠に、ここに彼女の弁当箱が入ったトートバッグが——

「……あ」

やべえ。返すの忘れてた。

どうしよう。今すぐ追いかけるべきか。いや待て、こういうのって普通は弁当箱を洗って返すのが礼儀だったりするのか？ でも、毎朝自分の弁当を作っていると行ってたから、明日も使う予定なのかもしれないし……まあ、どっちにしても、今から追いかけて確認すればいいだろう。俺はくるりと踵を返し、来た道戻って織原さんを探す。確か、駅の外にあるコインロッカーの方に歩いていったと思うんだけど……あ、いた。

人混みの中に、織原さんの後ろ姿を発見。

「お——」

名前を呼ぼうとして、慌ててやめる。なぜなら彼女が、ちょうど女子トイレに入っていくところだったから。

まいったな。

さすがにこのタイミングだと、声はかけにくい。

とりあえず出てくるのを待てるか。あんまり女子トイレの近くににいるのもなんだし、少し離れたところで待っているとしよう。

けれども。

十分経っても——織原さんは女子トイレから出てこなかった。

スーツ姿をしたOL風の女性や、小さい娘を連れた母親、うちの学校の女子など、たくさん女性の出入りするけど、その中に桐女の制服を着た女子の姿はない。

さらに十分が経過。

彼女はまだ出てこない。

あれ？ 見逃したかな？

さすがにこれ以上女子トイレの入り口を観察し続けるのは限界だったので、俺は織原さんへとメッセージを送った。今日のお礼と、弁当箱について。

返事はすぐに返ってきた。

文面から察するに、どうやら彼女は、すでに駅から去っているらしい。

ってことは……女子トイレから出てくのを見逃したってことなのか？ まあ、ずっと集中して見てたわけじゃないから、スルーしてもおかしくはないと思うけど……うーん。

どこか腑に落ちない違和感があったけれど——そんなものは全部、次のメッセージで吹き飛んだ。

『迷惑かけてごめんね。』

また今度遊ぶときに、返してもらっていいかな？』

どうやら、労せずして次に遊ぶ約束ができてしまったらしい。

順調過ぎて怖いぐらいだった。



「へー。僕の知らないところで、ずいぶんと面白いことが起きてたんだね。でも嬉しいよ、モモにもようやく春が来たのか」

友人である金尾遥かなおはるの反応は、予想どおり爽やかだった。

いつも通りの空き教室で昼食。

今日はウラに加えて、カナもいた。最近は新しくできた彼女と一緒に昼食を取ることが多かったが、今日は俺達のところに戻ってきたらしい。

「水臭いなあ。好きな子ができたなら、なんですぐに言ってくれなかったんだよ。僕とモモの仲じゃないか」

爽やかな笑みで頼もしいことを言ってくれるカナ。

つつてもなあ。街中で平然とナンパとかできちゃうこいつと、恋愛経験ゼロの俺とじゃ、根本的に話が合わなそうなんだよなあ。恋愛偏差値に差があり過ぎてアドバイスがアドバイスにならないぞう。

「友達としてできる限り協力するよ。モモに彼女ができたなら、僕も嬉しいしね。上手うまくいったら、そのうちダブルデートしようよ」

「……おい、カナ。お前、モモを恋愛中毒者どもが蔓延はびこる冥府魔道めいふまどうに引き込むじゃねえよ。モモは僕と一緒に、誰も愛さず、誰からも愛されない、気高き陰キャ道を歩むんだよ」

「お前の方が冥府魔道じゃねえか」

軽く突っ込む。そんな俺とウラを、カナはくすくすと笑っていた。

金尾遥。

細身でスラッとした体型で、顔立ちも整ったイケメン。明るく染めた髪はムカつくぐらいサラサラ。目元は涼しげで、見た目から清涼感が溢れまくっている。性格は極めて社交的であり、老

若男女を問わず誰とでもすぐ仲良くなる。高校入学してまだ一ヶ月にもかかわらず、すでに一年全体の七割と連絡先を交換しているという。女たらしを通り越して、人たらしの領域に住まう美男子だ。

浦野泉と同じ、俺の昔なじみの一人。

カナこと金尾遥は、小さい頃は割と暗くて引っ込み思案で、クラスでもいつも一人で本を読んでいるような子供だった。しかし地獄のように天国だった中学時代を経て、このような陽キャの中の陽キャになった。

「でもさ、モモが一目惚れしたってことは、その姫ちゃんって子、かわいいでしょ？ ねえねえ、写真とかないの？」

「ねえよ。つーか、馴れ馴れしく下の名前で呼ぶな」

俺だってまだ織原さん呼びなんだぞ。まったく、これだから陽キャは。どういう神経してたら、女子をいきなり名前で呼べるんだか。

「じゃあインスタは？」

「SNS全般、やってねえってさ。そういうの、よくわかんないとかで」

「へえ。今時のJKにしては珍しいね」

まあな。今日び、俺みたいな陰キャすれすれの奴でもインスタやってるからな。適当に人の上げた写真を眺めるだけで、自分からなにか投稿することはないけど。



「それでモモ、次のデートの約束はしたの？」

「まだだよ。と、とりあえず……一週間ぐらいは向こうからの連絡待ってみようかと思ってるさ。あんまりがつつついてる感、出したくないし」

「あのさモモ」

溜息混じりにカナは言う。

「そんな受け身が許されるのは、僕みたいなイケメンだけだよ？」

……イケメンって。自分で言うなよ。

「ただ待ってるだけで向こうから女が寄ってくるなんて、相当なイケメンじゃない限りありえない——いや、イケメンでも無理かもね。受け身なだけの男なんて、女子からしたらなんの魅力もないから。いいかいモモ？ 全ての女性はお姫様なんだよ？ いくつになっても、王子様にリードして欲しいと願う生き物なんだ」

「な、なるほどな……」

「けっ。なあにがお姫様だ。これだから女って生き者は嫌なんだよ」

感心する俺と、心底うんざりしたように毒を吐くウラ。

カナはさらに続ける。

「モモは昔、『昔話のお姫様が、王子様のなにに惚れるかわからん』とか言ってたけどさ。王子様は皆、自分からアクションを起こしてるんだ。お姫様の外見に惚れただけだったとしても、

きちんと自分から愛を伝えているんだ」

それは——そうなのかもしれない。

愛を伝える。想いを言葉にする——それはきつと、なによりも大切なことなのだろう。必死に言い訳を重ねて受け身の自分を正当化していた俺には、王子様達を小馬鹿にする資格なんてなかったのだ。

「はんつ。結局は王子様がイケメンで金持ちだから成立する話だろうが。貧乏で不細工な男が、一生懸命アクティブに行動しようとして、ストーカー扱いされるだけだつーの」

皮肉げな口調でなにかもを台無しにする正論を吐くと、ウラはテーブルの上に置いてあった俺のスマホに手を伸ばした。

「モモ、スマホ貸してみろ。アプローチするつもりなら、僕が文面を考えてやる」

「お、おい、やめろって」

「こういうのはストリートなのがいいかなー、『こんにちは。好きです』」

「ストリートだなおい!?!」

「『あなたに一目惚れしました。そう、つまり一目惚れなので、あなたの外見的要素だけに惚れたということです。内面は一切評価していません』」

「表現が悪意に塗れ過ぎだろ!」

「『どうか俺と、セックスを前提に付き合ってください』」

「結婚を前提に」みたいに言ってるんじゃないよ！」
 「なんだよ、あらゆる男女の付き合いは、結局セックスが前提のお付き合いだよ？ 僕、なんか間違ってますか？」

「建前^{たてまえ}でもんがなんだよ、この世には！」

「けっ。どうせモモもその女とやりたいだけなんだろう？ 性欲と恋愛感情を勘違いしてるだけなんだろう？ まさか出会って三日やそこらで内面に惚れたとは言わせねえぜ？」

「それは……くそ。いいから返せよ！」

ぎゃーぎゃーと言い争いながら、スマホを奪い合う俺達。

するとそこで——スマホが振動した。

俺は瞬時にウラからスマホを奪い取り、画面を凝視した。

織原さんからのラインだった。

書かれていたのは——信じられない文面だった。

「ど、どうしたモモ？ やべえ顔になってるぞ？」

「もしかして姫ちゃんから？」

ウラとカナに、メッセージの内容を伝える。いつも通りの堅苦しい挨拶から始まり、俺が預かっている弁当箱について言及。弁当箱を返してもらうために、俺との時間を作りたいとのこと。そこまではいい。そこで予想できていた。けれど最後の一文が、俺から平常心の全てを奪い去った。

『お弁当箱を返してもらおうついでに

桃田くんささえよかったら

今日の日曜日、一日、私とデートしてくれませんか？』

なにが——なにが起こったのだろう。

嬉しいを通り越して、頭が真っ白になりそうだった。

受け身だけでいたら、ポンポンとイベントが進んでいく。好転していく。

願ってもない僥倖^{きようこう}に戸惑^{戸まご}うばかりの俺に、かけがえのない友人二人は「ちっ。死ねばいいのに」壺^{つぼ}とか買わされないように気をつけなよ」と、大変温かい言葉をくれた。



日曜日までに、服をどうにかしようと思った。

高校に入ったらもうちよいファッションも頑張ろうと決意していた俺だけれど、入学一ヶ月ではまだなんの用意もない。まさかこんなにも早く、己^{おのれ}のファッションセンスが試される日が来るとは予想してなかった。

カナか姉貴にでも頼んで、デート用の服を丸ごと一式コーディネートしてもらおう。そう考えていたのだが——しかし幸か不幸か、その必要はなくなった。

「あっ。おはよう、桃田くん」

今日は織原さんの方が、早く待ち合わせ場所に着いていた。軽く挨拶を返ししながら、俺は彼女の下へ歩く。自然と小走りになってしまった。

約束の日曜日。

時刻は午前十時。集合場所は、前と同じ駅前の広場。

そして——格好までもが前と同じ。

俺も織原さんも、制服姿だった。

「あの……今日、どうして制服なんですか？ いや全然、別にいいんですけど」

お互いに制服で来よう、というのには織原さんからの要望だった。異論はない。むしろ服で悩まずに済んで助かったと思ってる。

ただまあ、織原さんの私服姿を見られなかったのが惜しいような気もするけど。

「特に意味はないんだけどね」

織原さんは苦笑しながら言うと、両手でスカートの端をチョンと摘んでみせた。

「制服デート、してみたくてさ」

『デート』。その単語だけを妄に意識してしまい、気恥ずかしさを感じずにはいられなかった。

ああ、やっぱりこれ、デートなんだよな。

「さて、と。じゃあ、行こうか、桃田くん」

「はい……って、どこに？」

「どこって決めてるわけじゃないんだけど……なんか、適当に、ぶらぶらしようよ」

「ぶらぶら」

「そ。ぶらぶら」

織原さんは晴れやかな笑顔で言う。

「学生らしいデート、しょ」

まずは昼食。

二人で駅中のハンバーガーチェーンに入った。

「わあ。こういうところ来るの、すっごい久しぶり」

目を輝かせる織原さん。俺は友達とよく来るけど、お嬢様高校に通う彼女は、やはりこういったチェーン店にはあまり来ないようだ。

店内には俺らと同年代の学生達がたくさんいた。織原さんを見て「あの桐女の子、かわいくね？」とヒソヒソ会話をする奴らもいて、少し誇らしい気にもなった。

二人でセットを注文。料金は織原さんの希望で割り勘。奥にある席に座り、手頃な価格のハンバーガーを食しながら、取り留めもない話をする。

「へえー。織原さん、意外とゲームとかやるんですね」

「やるやる。めっちゃやる。休みの日なんか、一歩も外出ないで一日やってるかも」

「今はなにやってるんですか？」

「いろいろやってるけど、一番やってるのは『スマブラ』かなあ」

「あ。俺もやってます」

「ほんと!? 面白いよね、『スマブラ』! 何歳になっても面白い! 私、『ロクヨン』の頃からずっとやっててさ! コンソローラーの真ん中のアナログスティックが、クタクタになるぐらいやりこんじゃって——」

「……ろくよん? ろくよんって、なんでしたっけ?」

「え……あつ。そ、そうか、今の高校生は普通、『ロクヨン』知らないよね。私は……えつと、お姉ちゃんがいたから、うちに『ロクヨン』があつただけど……じゃあ桃田くんは、『キューブ』から『スマブラ』始めたタイプ?」

「きゅーぶ……? いや、普通に『ウィー』が最初ですけど」

「……さ、最初っから『ウィー』世代……!」

織原さんはなぜかそこで、急所を抉られたかのような深い絶望の表情となった。

食事の後は、カラオケに行こうという話になった——のだけれど。

「……や、やっぱり、やめよっか」

「そ、そうですね」

店舗の前まで移動しながら、結局二人してあと一歩が踏み出せずに終わった。うん、やっぱりカラオケはハードルが高い。相手の前で歌うのが恥ずかしいし、密室空間に二人きりつてのもいろいろ難易度が高い気がする。

カラオケにこそ人らなかつたが、そこから音楽の話が始まる。

「織原さんは、どういう音楽が好きなんですか?」

「うーん、特定のコレっていうのはないかなあ。なんでも聴く。そのときそのときで、自分の中でブームが変わる感じ」

「あー、俺もそんな感じですねえ。ドラマやアニメの主題歌とかから、そのジャンルにハマるのが多いです。それで、自分で勝手に自分用の『ベスト』作ったりとか」

「あ。それ、私もやる」

「ほんとですか?」

「うんうん。シチュエーションごとに自分だけの『ベスト』作ったりしてね。懐かしいなあ。中

学校のときとか、『落ち込んだとき用』とか、『勉強BGM用』とか、そういうのMDでたくさん作ってたなあ」

「……えむでいー？　つて、なんですか？」

「あれ……え、MD知らないの!?　嘘……じゃあ、なにで音楽聴いてたの……?　桃田くん、生まれて初めて買った音楽プレイヤーは……?」

「普通に『Pod』ですけど」

「……さ、最初っから『Pod』世代……」

織原さんはなぜかそこで、臍^{ぞうぶ}を丸^{まる}ごと削^そぎ取られたかのような苦悶^{くもん}の表情を見せた。

次は書店へと足を運んだ。

ゲームと音楽に関しては、いまいち話題が噛み合わない感があったのだけれど、なぜか漫画に関してはバツチリ話があった。

「桃田くんって、結構、昔の漫画読んでるんだね」

「まあ、なんかしら目にする機会が多いですからね。あと、漫画アプリで再連載してるの見て、そっから興味持って電子書籍で買ったたり、漫画喫茶で読んでみたり」

「なるほど」

「俺らが生まれる前に連載が始まったような漫画が、今も続いてたりもするし……あと最近になってアニメ化したりしますからね」

「あー、確かにね。最近、過去作のリメイクが多いよね、アニメ業界」

「『ワンピース』も俺らが生まれる前からやってる作品らしいんですけど、親父が買ってたんで、小学校ぐらいから一緒に読んでましたね」

「……へえ、お父さんが。ち、ちなみに、お父さんっていくつ？」

「えっと、俺の23上だから……今年で38かな」

「さ、38!?」

「はい……ど、どうかしました？」

「う、ううん。なん、でも、ない……」

織原さんはなぜかそこで、白目を剥^むいて卒倒しそうになっていた。

午後三時を超えた辺りで、駅の近くにある『ラウワン』に向かった。学生らしいデートの定番といえば、この辺りだとやはり『ラウワン』になるだろう。

日曜日ということで、建物の中は混雑していた。家族連れや学生と思^{おぼ}しき集団、そして若いカップルなど。彼らの会話や流れる音楽で、建物の内部はだいぶ騒々しかった。

「わ、わ……すごーいっ」

二階にある受付から吹き抜けのフロアを見渡し、織原さんは目を輝かせた。

「もしかして、『ラウワン』来るの初めてですか？」

「う、うん。実は、そうなの」

興奮を隠しきれない様子で、小さく頷く。

「なんていうか……高校での私って、そういう感じじゃなくてさ。ずっと興味はあったんだけど、来る友達もいなくて」

表情に陰を落として呟いた後、なにかを期待するような目で俺を見る。

「桃田くんは、よく来るの？」

「まあ、それなりに」

「じゃあさ」

織原さんは言う。

俺の制服の袖を、ぎゅっ、と掴みながら。

「今日はこの遊び方教えてね、桃田くんっ」

その仕事と言葉は、俺の胸を撃ち抜くには十分過ぎた。

教えると言っても、総合アミューズメントパークに正しい遊び方なんてものは存在しないだろう。ただただ好きなことをやればいいだけだ。

ボウリング、バッティングセンター、ミニバス、ダーツ、卓球、テニス、バドミントン、セグウェイ、ゲームセンター……などなど。

俺達は時間の許す限り、様々なアトラクションを満喫した。

学生らしい、健全で低予算なデートを、満喫した。

「あーっ、楽しかったっ。久しぶりに思い切り動いた気がする」

五階でエレベーターを待っている途中、織原さんは大きく伸びをした。

「でもアレだねえ……桃田くんって、意外と運動オンチなんだね」

「うぐっ……」

「バッティングセンター、一球もかすりもしなかったし、バドミントンや卓球も空振りばっかりで……バスケのドリブルなんか、ヨボヨボのおじいちゃんみたいで——あっ。こ、ごめんっ。違うよっ、バカにしたわけじゃなくてっ」

際限なく落ち込み始めた俺に気づいたのか、織原さんは慌ててフォローをいれてきた。

「その、あの……か、かわいかったよ！」

「……嬉しくないです」

「わ、悪く言うつもりは全然なくて、ただ驚いちゃったただだから……桃田くん、背も大きく

て筋肉質だから、てつきりなにかスポーツやってるのかと思って」

「……運動全般、昔っから全然ダメなんですよ」

昔から背だけは大きい方だったため、スポーツ関連では、勝手に期待されて勝手に失望されるが多かった。本当に多かった。高校に入学したときもバスケット部やバレー部から『是非!』と誘われたが、必死で断った。それでも諦めてくれないから、仕方なく体験入部に行ったところ……二度と誘われることはなくなつた。

「筋肉があるのは、親父の仕事、たまに手伝つたりしてるからで……てか、運動オンチなのは、織原さんも一緒でしょ?」

「なっ」

「俺の後に『お姉さんが見本を見せてあげるわ』なんて得意気に言いながら入つたくせに、結局、俺と同じで全球空振りだったじゃないですか」

「ち、違うもん! 私は、一球だけかすつたもん! チツ、って音なつたから!」

「一緒ですよ!」

「違う! 私の方がちよつとすごいっ!」

数秒睨み合うけれど、

「……ぷっ」あはは」

すぐにお互い、あまりのくだらなさに、吹き出すように笑つた。

エレベーターが到着し、俺達は一階へと降りていく。

ああ——楽しいな。

幸せて、こういう瞬間のことを言うんだろうか?

なんかいい雰囲気な気がする。よし。今なら、次のデートの約束を取り付けられそうだ。これまでずっと相手にリードされてばかりだったから、今日こそは自分から次へのアプローチを繰り返さねば。

受け身は今日で卒業しようじゃないか。

エレベーターから降りて、一階のゲームセンターコーナーを横切つて出口へ向かう途中、昨日必死で考えた『次のデートへの誘い文句』を頭の中で反芻する。

そしていざ口に——出さうとしたところで。

「——っ!? か、隠れてっ!」

織原さんがピクリと身を震わせたかと思えば、いきなり俺の手を掴んできた。

「えっ、な、え?」

「かい……が、学校の知り合いがいたの! お願いつ、一緒に隠れて!」

切羽詰まった様子で訴えながら、織原さんは俺の手を引っぱり、二人でブリクラ機の陰へと隠れた。筐体と筐体の間はかなり狭く、結果としてお互いの体がかかり密着してしまう。

「~~~~っ!」

「ごめんっ、桃田くん、大丈夫っ？」
「だ、大丈夫ですっ」

本当は全然大丈夫じゃねえ。まずい。いろいろまずい。ちょうど真正面から抱き合うような体勢になってしまったため、俺の体に、織原さんの豊かな胸が思い切り当たっている。圧迫されてひしゃげる二つの膨らみ。柔らかく、それでいて弾力にも富み、ブレーザー越しでも破壊力は抜群だった。

「……………どうしょ。こんなとこ見られたら」

よほど焦っているのか、織原さんは知り合いの動向ばかりを気にしていて、俺との密着具合には気づいていない。ぐいぐいと無造作に無遠慮に豊乳が押し付けられ、生々しい温度の吐息が首筋を撫でる。まずい、まずい、つてこれ。

「んっ……………桃田くん、もつと、奥まで……………あんっ……………お、大つきいっ」

エロいって！ エロ過ぎるぞ、織原さん！ 「訳…桃田くんは身長が大きいので、もつと奥まで詰めてください」と頭じゃわかっているけど変な風にしか聞こえねえから！

「……………あ。よかった。カラオケの方にいったみたい」

通路の方を見ていた織原さんが安堵の息を吐く。知り合いはいなくなつたようだ。

「はあ〜、ほんとによかつた……………つて、あつ……………や、やだっ」

危機を脱して安心したことで、ようやく俺達の現状に気づいたらしい。織原さんは逃げるよ

うに筐体の隙間から飛び出した。

「ご、ごめんね、桃田くん……………その、へ、変なの押し付けちゃって」

全然構いません。むしろもつと押し付けてください——なんて言えるわけもない。視線を逸したまま、「……………だ、大丈夫っす」というのが精一杯だった。

『きゃーっ、へんたーいっ！』とピンタされることも覚悟してたのに、まさか謝られてしまうとは。なんだろ、この人は天使なのか。それとも女神なのか。

「つーか……………冷静に考えたら、二人で隠れる必要なかつたですよ。織原さんだけ、プリクラの中にも入つてれば」

「え……………あつ。そうだね……………。テンパつてて、全然気づかなかつた……………」

恥ずかしそうに苦笑する織原さん。それからほんやりと、なにかを懐かしむような目で、プリクラの筐体を眺めた。

「ねえ桃田くん。よかつたら、一緒にプリクラ撮ってもらつていい？」

「プリクラ、ですか」

「私……………撮つたことなくてさ。桃田くんはある？」

「あー、昔、姉貴に付き合われて撮つたぐらいですな」

小学生の頃の話だ。プリクラは、十年前ぐらいに大流行だったと聞く。当時のJK・JCからの人気が決まじかつたとか。スマホや自撮りアプリが普及したせいで、最近はだいぶ人気

落ち着いているようだけれど。

「ねえ、撮ろうよ、桃田くん。今日の思い出にさ」

織原さんに促されて、俺達は白いカーテンの中に入る。

「わっ……な、なにこれ、どうしたらいいの？」

「確か、ここにお金入れればよかった気が」

「え、え、え!? なにこのフレームって、どれ選べばいいの!?!」

「たぶん、なんか適当に選べばいいんじゃないかと」

「も、桃田くん!? 大変だよっ、制限時間がなくなっちゃうっ!」

「大丈夫ですって。時間なくなったらなくなっただで適当に進みますから。たぶん……」

よくわかってない者同士、あたふたしながら撮影を済ませる。やたらとテンションの高い機
会音声は、『今度は二人で抱き合ってみよう!』『二人の顔を、ぎゅーって近づけて!』など空
気を読まない妄言を繰り返していたが、俺達二人は、少し距離を空けて並び、ぎこちないピ
スサインを作るので精一杯だった。

「こ、これで撮れたのかな?」

「はい。あと、こっちで落書きとができますよ」

「落書き……わ、私よくわかんないから、桃田くんやってよ!」

「む、無理ですよ、俺、こういうのセンスないですから!」

「またもや素人同士、あたふたしながら落書きを済ませる。日付や名前を入れたりという、本
当にオーソドックスな加工だけを施した。」

「一分ほど待っていると、筐体の横から完成したプリクラが排出される。近くのテーブルに置
いてあったハサミで完成品を二人分に分けた。」

「わあっ、すごーいっ。プリクラだプリクラ、初プリクラっ!」

織原さんは目を輝かせ、サンタからプレゼントをもらった子供のように喜ぶ。

「ありがとね、桃田くん、私のわがままに付き合ってもらって」

プリクラを胸に抱きしめるようにして、彼女は言う。

「その声には、その表情には、どこか神聖で、静謐な雰囲気があった――」

「私、一生の思い出にするから」
「――っ」

どうして、だろうか。

その瞬間、胸が激しく痛んだ。

笑っている。

「織原さんは、本当に幸せそうに笑っている。」

「ただ俺には、必死に涙を堪えているように見えた。顔で必死に笑顔を作りながら、今にも
溢れだそうとする涙を必死に抑え込んでいる。」

寂しく、儂く、脆く。

それでいて、なんらかの覚悟を決めたような、あまりに悲痛な笑顔——
「え……も、桃田くん？」
気がつけば。

俺は、プリクラを握りしめる織原さんの手を掴んでいた。
今捕まえなければ、どこかに行ってしまう気がしたから。

こんなにも近くにいるはずの彼女が、急激に不鮮明な存在に思えて、ふとした拍子に消えてしまうような気がしたから。

彼女の手から溢れたツショットのプリクラが、ふわりと床に落ちる。

「好きです、織原さん」

俺は言った。

覚悟——なんてなにも決まっていない。

理性も思考もなく、本能と衝動のままに、想いを言葉にしてしまった。

直後、猛烈な後悔と羞恥が襲い掛かってくる。心臓が信じられないぐらいに高鳴り、体中の血液が逆流したみたいに全身が震え出した。

自分でもわからない。

なんでいきなり、告白してしまったのか。

ただ——どうしようもないぐらいに、もどかしくなってしまったのだ。

今この瞬間を逃したら、もう二度と彼女に会えなくなるような。

目の前にいる織原姫という存在を、永劫に失ってしまうような。

そんな喪失感が、俺の思考を狂わせた。

「え……あ」

織原さんは目を見開き、呆然としていた。掴んだ細い手首からも動揺が伝わってくる。怯えているようにも見えて、罪悪感すら湧いてきた。でも、もう後には引けない。恐怖と緊張を必死に押し殺し、胸の奥底から言葉を振り絞る。

これが俺の、生まれて初めての告白——

「好き、です……織原さん。たぶん、一目見たときから、ずっと」
たぶん、はいらなかつたかもしれない。

でも——これが本音だ。素直な思いだ。

一目惚れなのかどうかは、自分でもわからない。でも今、『一目惚れだったことにしたい』自分がいる。なにかもかが運命で、俺達は出会うべくして出会ったのだと、愚直なまでに信じていたい——その思い込みを、少しでもいいから勇氣に変換したい。

「まだ、出会ってから一週間も経ってなくて……なに言っただって思うかもしれないですけど……でも、好きです。どうしようもないぐらいに、大好きです。出会ってからずっと……あなたのことだけ、考えてます」

友人のウラは言っていた。

どうせヤリたいだけだろ、と。

「出会って三日やそこらで内面に惚れたとは言わせねえぜ、と。」

確かに見た目は大きい。織原さんの見た目が、俺は大好きだ。顔にしても体型にしても本当にストライクと真ん中。ヤリたくないと言えば当然嘘になる。童貞が性欲と恋愛感情を混同しているだけだと非難されれば、正直返す言葉がない。

でも、それだけじゃない。性欲だけじゃない。

まだ数えるほどしか会っていないけれど、彼女と一緒にいる時間が、楽しくて楽しくて仕方なかった。失いたくない。手放したくない。この幸福な一瞬を、どうか永遠のものとしたいたい。たとえそれが性欲由来の感情だったとしても、どうか今だけは、この暴れ狂う想いを『恋』と呼ばせて欲しい。

「まだお互いのこと、なんも知らないと思います。でも、これから少しずつ知っていききたい。あなたのことを知りたいし、俺のことも知ってほしい。織原さん……俺はもつと、あなたと一緒にいたいです」

もつと一緒にいたい。

もつと——相手を知りたい。

もつと——自分を知ってもらいたい。

もつと知って、もつと知ってもらって——もつともつと好きになりたい。

こんな気持ちになったのは、生まれて初めてだった。

友人のカナは言っていた。

受け身だけの男にはなんの魅力もない、と。

王子様は皆自分からアクションを起こしている、と。

ならば——自分から動くしかないだろう。

金持ちでイケメンな王子様であっても、能動的に動かなければお姫様を手にできないというのであれば、俺のような童貞が受け身なままでいてなにかが変わるはずもない。

勇気を振り絞って、想いを言葉にしなれば、世界は変わるはずもない——

「好きです、織原さん。俺と——付き合ってください。」

俺は言った。

緊張と興奮で茹だつてしまっような頭で、どうにか想いを言葉にした。心臓の動悸はまるで収まらない。相手の顔を見るのが怖くて、俯いて目を閉じていた。

返事を待つ間は、とてつもなく時間が長く感じた。永劫の如き沈黙に耐えきれなくなり、俺

は恐る恐る顔を上げて、目を開けた。
そして目に入ったのは――

「……っ」

涙、だった。

織原さんは泣いていた。魂が抜けてしまったような顔で、静かに、とても静かに涙を流していた。ずっと握り締めていた手を、反射的に離してしまふ。

「お、織原、さん……?」

「……うっ……うう、ううう」

両手で顔を隠し、嗚咽おえつを漏らし始める。溢れ出す涙は手だけでは到底抑えきれず、雫しずくとなつて頬を伝い、落ちていく。

「……め……さい」

困惑する俺に、織原さんは嗚咽混じりの声で告げる。

「――ごめんなさい」

止まった、気がした。

時間も、呼吸も、心臓も、世界も、なにもかもが。



それなのに頭だけは、思考だけは、妙に冷静で妙に冷めていた。

『ごめんなさい』。

それはきつと、告白を断るときの定型句なのだろう。悪いなんて微塵も思っただけでも、相手になんの思い入れもなくとも、相手が好意を伝えてきたなら、社交辞令で『ごめんなさい』と返すのが、この国の礼儀みたいなものだ。

けれど――

「ごめんなさい……ごめ、なさい……ごめん、なさい……い……」

織原さんはまるで、なにかの呪いのように『ごめんなさい』を繰り返した。滂沱の如く涙を流しながら繰り返し返される謝罪は、とても社交辞令には思えなかった。

本当に、心の底から、謝っているかのような。

罪の意識で、押し潰されそうになっているかのような――

何度も何度も『ごめんなさい』を繰り返した後、やがて彼女は、涙も拭かずに逃げるように去っていった。俺は――立ち尽くすことしかできなかった。足元には彼女が落としていったブリクラがある。写真の中の俺達二人は初々しくも幸せそうで、ほんの数分前の出来事なのに、別世界のことのように思えた。

わからない。

なにがなんだか、わからない。

ただ一つだけ言えるのは、今日は俺が生まれて初めて告白をした日だ。
そして、生まれて初めて失恋をした日になったということ。

第二章



お姫様には秘密があったのです。

翌日は月曜日だったけれど、朝、ジャンプを買い忘れていた。

それに気づいたのが放課後だった。

発売日にジャンプを買い忘れたのなんて、何年ぶりかわからない。

「はっはっはっはー。残念だったなあ、モモ」

放課後の空き教室には、言葉とは裏腹に大層楽しそうに笑うウラがいた。アメーバのように机にもたれかかった俺の肩を、馴れ馴れしく叩いてくる。

「やっぱりモモには、僕と同じエリート陰キャの血が流れてるのさ。恋愛なんぞに現を抜かそうとしても、誇り高きお前の血がそれを許さないんだよ」

エリート陰キャってなんだよ、と普段なら軽く突っ込むところだが、今日はなにも言う気が起きなかつた。昨日、家に帰ってからずっとこの調子だ。なにもやる気が起きない。胸にポツカリと穴が空いてしまったようだ。

「ショックし、その織原とかいう女は大した悪女だな。自分からデートに誘つといて、いざ告白されたら『ごめんなさい』なんて、意味不明にもほどがある。脈がないなら、最初から優しく

するなつてーの。体よく男をキープして、モテる自分に酔うのが楽しいんだろうな。モモも災難だったな。承認欲求丸出しのクソ女に掴まって——え、ええっ!？」

気がつけば俺は、ウラの胸ぐらを掴み上げていた。

「ひ、ひいいいいっ」

「あー……悪い」

尋常じゃないぐらいビビった顔が目に入り、ハツとして手を離す。涙目になったウラは、凄まじい速度でカナの背後に隠れた。

「こ、この野郎っ! や、やんのか!? やるならもう、僕、キレるぞ! 僕、キレつとやべえんだからな! キレたら記憶なくなるけど、冷徹な殺人マシーンになって、身の回りにある文房具とかでの確に人体の急所を突くんだからな!」

「記憶ありまくりじゃないか」

カナは冷静に突っ込みながら、ウラの頭を軽く撫でる。

「今のはウラが悪いよ。いくらなんでも無神経過ぎる」

「な、なんだよお……カナまで」

ウラはシュンと落ち込む。

「僕はただ……モモの純情を弄んだ女がムカつくだけだよ」

「わかってるよ、ウラなりにモモを元気づけようとしてたことは。けど恋愛ってのは、そう単

純なものじゃないから」

カナはその涼しげな目を、俺の方へと向ける。

「とりあえず、お疲れ様、モモ。柄にもなく頑張ったみたいだね」

「……ん」

憔悴しきった心には、劳いの言葉が深く染み入った。

ほんとこいつは、ムカつくぐらいイケメンだなあ。あーあ、もう、カナと付き合っちゃおうかな。女なんてもう懲り懲りだわ。今彼女いるらしいけど、二番目でもいいから——なんてバカな思考を振り払い、俺は顔を上げる。

椅子に体を預けて天井を仰ぎ、深々と息を吐いた。

「あー……畜生。しんどいなあ……」

昨日の今日だ。立ち直れるはずもない。本当は学校も休んでしまいたかったけれど、皆勤賞のために体を引きずるようにして登校した。

それに——家に一人でいるよりも、誰かに愚痴を聞いてもらいたかった。気心知れた友人であるこいつらに、どうにもならない消化不良な思いを吐き出したかった。

「……別に、勝算とかを計算してたわけじゃねえんだけどさ。イけるかもしれない、って思ってた部分はあったんだよ。向こうから、いろいろ誘ってきてくれたし、一緒にいるとき、織原さんもすげえ楽しそうだったし……」

脈はあると思っていた。でもそれは、自惚れだったのだろうか。女に慣れていない童貞が、相手の気遣いや社交辞令を愉快に勘違いしてしまっただけなんだろうか。

「ほんと……なんだったんだろうな」

なんだったんだろう。

この一週間は、なんだったんだろう？

彼女にとつて俺は——織原姫にとつての桃田薫は、なんだったのだろうか？

「ねえ、モモ。相手の女子の名前って、織原姫ちゃんて、いいんだよね？」

ふと真面目な顔して、カナが問うてきた。

「あ、ああ。それが、どうかしたのか？」

「悪いとは思ったんだけど……僕の方でその子のこと、ちょっと調べちゃったんだよね。モモがどんな女の子に惚れたのか気になってさ。桐女にいる友達何かに連絡して、どういいう子か聞いてみたんだ」

「お前、そんなことしてたのかよ」

「いないってさ」

カナは言った。

「いないんだよ、モモ。今の桐女の一年には、織原姫なんて生徒はいないらしい」

「は……？？？ いない？ ど、どういう意味だよ？」

「そのままの意味だよ。五人ぐらいに聞いてみたけど、誰も知らなかった。探しても見つからなかったらしい。織原姫は——桐女の生徒の中にはいなかったんだよ」

「……………」

意味がわからなかった。

いない？

いないって、どういうことだ？

「……偽名、だったってことか？」

「その可能性もあると思う。でも僕は別の可能性の方を疑ってる。その子はもしかすると——桐女の生徒ではなかったんじゃないのかな？」

「はあ？ なに言ってるんだよ。織原さんは、ちゃんと桐女の制服を——」

「制服、しか見てないんでしょ？ 学生証を見たわけでも、彼女が桐女に通うところを見たわけでもない。桐女の友人といるところを見たわけでもない。モモが彼女を桐女の生徒だと思える理由、制服以外になにかあるの？」

「……………」

なにも言葉が出てこなかった。

改めて考えてみれば、制服ぐらいいしかないかもかもしれない。彼女を桐女の生徒だと証明するのは、制服以外にもなかった。

俺が知っている織原さんは、いつも制服を着ていた。

日曜日のデートのときであつても。

まるで誇示^{こじ}するみたいに。

まるで——自分が桐女に通うJKだとアピールするみたいに。

「ふん。僕は最初から、なんか怪しい女だとは思ってたぜ」

ウラもまた、神妙な顔つきとなって告げる。

「一週間前に遅刻ギリギリで学校に来たとき、モモはその女が電車で痴漢に遭ったのを助けたらしいけど——そもそも桐女に通う女子が、モモと朝同じ電車に乗るわけがないんだよ。向かう方向が真逆なんだから」

それは——俺も抱いた疑問だった。忘れ物でもしたんだろう、と決めつけてそれ以上深く考えることはしなかった。

「モモ、お前まさか……モテナ過ぎて、実在しない女の幻を見たのか？」

「そ、そんなわけ、ねえだろ」

失礼過ぎるウラの発言にも、しかし強く言い返すことができなかった。全身から血の気が引いていくのがわかる。言いようのない不安感が、足元から徐々に昇って体を包み込んでいく。

「幻じゃねえなら……モモ」

ウラは言う。

「お前——誰を好きになったんだ？」
俺は答えられない。

織原さん——織原姫さん。

彼女は、俺が好きになった彼女は、いったい何者だったんだろう。まさか本当に幽霊や妖怪の類だったとしてもいいのか。

この一週間の出来事が、急激に不確かなものに変わっていく気がした。『全部夢オチですよ』と言われれば、うっかり信じてしまいそう。

恐怖にも似た感情に支配されて硬直してしまう——そんな俺を現実に取り戻したのは、ポケットの振動だった。

画面を見て——驚愕と安堵を同時に覚える。

織原さんからのメッセージだった。

連絡が来たことに対する驚きと、彼女の存在が夢ではなかったことを確信できる安心。

いつもとは違い、畏まった挨拶は存在しない。

不自然なぐらいに他人行儀な文章で、用件だけが書いてあった。

『昨日は、急に帰ってしまいすみませんでした。』

これから、時間があれば会って欲しいです。

そこで全部、お話ししようと思います』



指定された場所は、駅の近くにあるファミレスだった。

先に着いた俺は、奥まった禁煙席へと腰掛け、ドリンクバーだけ注文する。窓の外を眺めると、すでに日が暮れ始めていた。夕暮れに染まるアスファルトを、部活帰りの学生達が自転車走り抜けていく。

五分ほどで、織原さんはやってきた。

「こ、こんばんは」

「……うん」

どうにか絞り出した挨拶には、そっけない返事が返ってきた。織原さんは暗い顔のまま俯いている。いつもより心なしか化粧がキツいように見えた。

格好は——何度も目にした桐女の制服。

この人は、桐蔭女学院の生徒ではないはずなのに——

テーブルのボタンを押し、彼女もまたドリンクバーだけ注文する。

店員がいなくなると、地獄のような気ままずさが襲ってきた。

……キツツいなあ、これ。

なんなんだろう、この状況は。生まれて初めての失恋を味わった翌日に、なんでまたその相手と二人きりで顔を突き合わせなければならぬのか。

ぶっちゃけ断りたくてたまらなかった。でも、来ないわけにはいかなかった。話を聞かないわけにはいかなかった。

知りたかった。

俺が惚れた女が、いったい何者なのか——

「……まず、最初に言っておきます」

気まずい沈黙を破ったのは、織原さんだった。

感情を押し殺したような低い声で、淡々と言う。

「変に期待されると困るから、はっきり言うね。私は……きみとは付き合えません。今日呼び出したことで、なにか勘違いさせていたなら、ごめんなさい」

「……はい」

キツイ。死体蹴りもいいところだ。淡い期待なんか全く抱いてなかったけれど、改めて口に出されると、想像以上にしんどいものがある。

「今日、会ってもらったのは……桃田くんには、本当のことを話そうと思ったから」

「本当のこと」

「私、きみにずっと隠していたことがあるの……ううん、違う。隠してたんじゃない。私はきみのこと、ずっと騙^{だま}していた」

痛みに耐えるような顔で、織原さんは続ける。

「このままお別れしたら、あまりに不誠実な気がするから……最後に、ちゃんと全部、説明させてください」

ここで少し待ってて。

と言って、織原さんは席を立ち、ファミレスから出ていった。

隠していた？ 騙^{だま}していた？ なんのことだろう。てか今来たばかりなのに、なんで店から出てくんのだ？ 無数の疑問で頭が埋め尽くされそうになるけれど、俺は言葉に従い、ドリンクバーのコーヒーを飲みながら彼女を待ち続けた。

二杯目を飲み干したところで——一人の女性が俺の方に歩いてきた。

スーツに身を包んだ、OL風の女性だ。

黒い髪を後ろで纏^{まと}めていて、目元には細いフレームの眼鏡^{めがね}。パンプスで床を鳴らしながらテーブルの間を歩いてくる。

奥にあるトイレに向かうのかと思えば——彼女は俺の席で止まった。無言のまま俺の対面に、さっきまで織原さんが座っていた席に座る。

「……え？ あ、あの、すみません、もうすぐ、知り合いが来るんで」

「は——はじめまして、桃田薫くん」

戸惑う俺を無視して、OL風の女性は、緊張と気まずさを感じさせる声で言った。その声を聞いた瞬間——頭が大混乱に陥る。

今のは——彼女の声だった。

改めて、女性を正面から見つめる。

髪型も服装も、なにかもが別人のように違う。でも、よくよく見てみれば、顔は全く一緒だった。彼女そのものだった。

「私の名前は織原姫……年は、に、27歳、です」

なにを、どう言えはいいのだろうか。

俺が好きになった女子高生は——27歳だった。



第三章



そう。お姫様は
アラサーだったのです。

株式会社 はるみ生活

マーケティング事業本部

ダイレクトマーケティングチーム チーフ

織原姫

ORIHARA HIME

渡された名刺には、なんだか仰々しい肩書きが書いてあった。

『はるみ生活』と言えば、高校生の俺でも知っているような有名企業だ。化粧品やサプリメントを主に取り扱う会社で、テレビやネットのCMでもよく名前を目にする。本社は東京にあるらしいが、この辺りにも支部があったはず。

名刺の他に、社員証や免許証まで見せられた。

「……これで、わかつてもらえたかな？」

スーツ姿の織原さんは、まだどこか恥ずかしそうな顔で言う。

俺は——うなず頷くしかなかった。名刺や免許証など、確たる証拠を突きつけられてしまったのは、もう疑う余地はない。

織原さんは——女子高生ではなかった。

大人で、社会人で、会社員で、27歳だった。

「女子高生だなんて嘘ついてしまつて……本当にごめんなさい」

「い、いえ」

丁寧に頭を下げられても、謝罪を受け止めるだけの心の準備がまだできていない。頭も心もいっぱいいっぱいで、どうしたらいいかわからない。

「あの、さ」

なんにも言えずにいる俺に、織原さんは問うてくる。

「ほ、本当に、気づかなかったの……？」

「え」

「私が女子高生じゃないって」

「……はい」

「全然？ 少しも？ 全く？ 無理してる感じとかなかった？」

「……は、はい、ちっとも」

「ぞ、そっか。ふーん、そっかそっか」

少しだけ口元を綻ばせる織原さん。必死に冷静な表情を保とうとしているようだけど、喜びを抑えきれない様子だった。

「いやだって……気づくわけじゃないじゃないですか。まさかいい年こいた大人が、年甲斐もなくJKの格好して、堂々と恥ずかしげもなく街中を歩いてはしゃいでたなんて——あ」

失言に気づいたときには、もう遅かった。

織原さんは、致命傷を負ったかの如くテーブルに突つ伏した。にまにま顔が一点、瀕死の形相で悶えている。『殺せ、私を殺せ』と顔に書いてある。

「す、すいません」

「……ううん、いいのよ。自分でもキツイことやってたって、自覚あるから。はあ、ほんと、なんでこんなことになっちゃったんだろう？」

自嘲気味に吹きながら、織原さんはゆつくりと体を起こす。

もう一度改めて彼女の姿を見る。

正直、違和感がすごい。女子高生がスーツを着ているようにしか見えない。でも違う。違うのだ。俺が最初に、ブレザー姿で出会ってしまったから、変な補正が働いているだけなのだろう。

今日の前にいる、スーツを着こなす大人の女性が、本当の織原姫。

彼女の本当の姿が、これなんだ。

「——嘘、だったんですね、全部」

言葉が、溜息のように唇から溢れた。責めたつもりは全くなかったのだけれど、織原さんは苦しそうに唇を噛み締めた。

「桐女に通ってるってことも、タメだってことも」

「……うん、そう。本当に、ごめんさい」

「誕生日とか、干支は」

「そ、それは本当っ」

食い気味に言う織原さん。誕生日と干支は本当だったらしい。

俺と同じ、巳年——ってことは。

「……あ、そっか。年が一回り違うのか」

27歳と15歳。

その差は——12年。

「ひ、一回りも違うないよっ！ 11年と10ヶ月だから！」

一人納得した俺に対し、いきなり織原さんが叫んだ。

そこだけは譲れないとばかりに、大きな声で。

しかし、ムキになってしまった自分を恥じたのか、

「……まあ、ほとんど、一回りだけど」

と小声でつけ足した。

15歳の俺が九月末生まれで、27歳の織原さんが十二月頭生まれならば——年の差は、十一年と十ヶ月となるのだろう。

一回りには少しだけ足りない——でも、ほとんど一回りだ。

「あの……根本的な質問していいですか？」

「ど、どうぞ」

「なんで、女子高生の格好してたんですか？」

「……大人にはいろいろあるのよ」

核心に切り込む質問に対し、目を逸らしながら気まずそうに言う織原さん。

「そうか。やつば、そういうことだよな。」

「ま、まあ、趣味は人それぞれですよね」

「え……ち、違う違うっ！」

納得してフォローを入れた俺に対し、ぶんぶん首を振る。

「私、好きでやってたわけじゃないからね！」

「あれ？ JKのコスプレで街を練り歩くのが趣味ってことなんじゃ」

「違うからっ！ ああもう、ちゃんと説明するから、話を聞いて！」

必死の形相で訴えた後、恥ずかしそうに語り始める。

「えっと……なから話せばいいかな。とりあえず……私が、桐女に通っていたのは本当の話。」

もう、十年前の話になるけど」

十年前。

この人が高校時代を過ごしていたのは、十年も昔の話なのか——それはもしかすると、まだスマホが普及していない、プリクラの全盛期だったりするのだろうか。

「高校の友達で、今でも仲がいい子がいてね。雪ちゃんというんだけど……桃田ちもたくんに出会った日の前日、雪ちゃんの家遊びに行って、家で飲んだの」

飲んだ、というのは当然お酒のことなのだろう。27歳の織原さんは、アルコールの摂取も許される年齢なのだ。

「久しぶりに会ったから、お酒も話も止まらなくなっちゃって……気がついてたら二人ともベロンベロンで、前後不覚な状態だった」

そんな泥酔状態でいすになったとき、友人の雪さんとやらが言ったらしい。

——姫って本当に童顔よね。

——あなたなら今でも、女子高生で通用するんじゃないの？

「……そしたら雪ちゃんが、自分の高校時代の制服を持ってきてさ。私もだいたい酔っ払ったから、じゃあ着てみよっかなー、ってノリで……」

織原さんが着ていた制服は、彼女のものではなく友達のものであったらしい。サイズが少し小さそうだった理由が、これでわかった。その雪さんという方は、なんとどうか……織原さんほど豊かではなかったのだらう。

「ノリで制服を着て、髪やメイクも女子高生っぽく仕上げて……その後の記憶はほとんどない。気がついたら朝で、いつもならとつくに家を出てる時間だった。大慌てで雪ちゃんを飛び出して、『今から一回家帰ってスーツに着替えて会社に行けばギリで間に合う』って考えながらダッシュで最寄り駅の電車で滑り込んで——そこで、やっと自分の格好に気づいたの……」

両手で顔を覆って羞恥に悶える織原さん。過去の自分を殴りたくてしょうがない、という後悔がひしひしと伝わってくる。

「もうね……恥ずかしくて死ぬかと思った。なんの羞恥プレイなのよこれは……っ、って一人で頭の中でずつと叫んでた……」

羞恥心が振り切ってしまったのか、今度は遠い目をして乾いた笑いを浮かべる。

27の女性が、JKの格好で、満員電車……うん、まあ、フルコンボだな。男の俺には想像しかできないけど、なかなかキツイ恥辱なんだらう。

「ただでさえ地獄だったのに……まさかそこで、さらなる地獄が襲ってくるとは夢にも思わなかった」

自嘲気味に言う。

尋ねるまでもない——痴漢のことだらう。

「普通に痴漢が怖かったつてのもあるけど……それと同じぐらい、実年齢がバレたらどうしようって恐怖がすごかった……。声を上げて助けを求めれば、痴漢を社会的に殺せたかもしれないけど、そしたら私も共倒れだからね……。ふ、ふふふ。なんか、夕方のニュースとかで取り上げられそうだよ。『〇〇線で痴漢事件！被害者は女子高生……』のコスプレをした27歳のOL!?!』みたいな」

「あ……」

まさかそんな裏事情があったとは。

じゃあ織原さん、あのととき二重の意味で大ピンチだったんだな。痴漢という犯罪と、JKコスが周囲にバレる不安。たとえ痴漢を捕まえることができたとしても、その後にはたぶん駅員や警察からの身分証の提示を求められたりするんだらう。運が悪けりや会社に話が行ったりするのかもしれない。

それは……うん、軽く死にたくなる恥辱だな。

「もう、どうしたらいいかわからなくなつて、固まつてることしかできなかった。そんなピンチから私を助けてくれたのが——桃田くんだった」

「……………」

「改めてお礼を言わせてもらうけど……ほんつつつとうにありがとうね。桃田くんのおかげで、

どうにか社会的に死なずに済んだわ……」
 すげえ切実なお礼だった。

本当に心の底から感謝をしているような感じ。

「助けてくれたのが桃田くんで、本当によかった。きみがいなかったら私は……今頃この街を去っていたかもしれない」

「んな大げさな……。たまたま、ですよ。俺がたまたま見かけただけの話で。俺がいなかったとしても、誰か他の奴が助けたかもしれないし」

「ううん、違うよ」

織原さんは言う。

優しく、それでいてどこか熱っぽい眼差しで。

「桃田くんだったから、だよ。きみが恥ずかしい思いをしても私を守ろうとしてくれたおかげで、私は助かった。JKのコスプレした27歳だって、バレーに済んだ」

結果論だけ——あのときの俺の選択は、どうやらある意味最善手だったらしい。もしも痴漢を駅員に突き出していれば、彼女には痴漢に続く次の地獄が待っていたのだ。

「桃田くんが、女の人のことを思いやってくれる、優しい男の子だったから……」

「……………」

正直な話、あの日の救出劇は、あまりいい思い出にはなっていなかった。

無計画で行き当たりばったりで、お世辞にもスマートとは言えない解決法だった。周囲から

はいい笑いものにされ、恥ずかしい思いもした。

格好悪かったなあ、と少し後悔していた——

「すごく格好よかったよ、あのときの桃田くん」

「織原さん……」

かすかに頬を赤らめた艶っぽい笑みに、吸い込まれてしまいそうになる。
 数秒、見つめ合う。

しかし段々と羞恥が湧いてきて、二人とも同じタイミングで顔を逸した。

「と、とにかく、桃田くんのおかげで助かったのっ、私」

焦った声のまま、仕切り直すように言う。

「どうしてもお礼をしたかったから、電車を降りてから走って追いかけて声をかけて……あと
 はもう、説明しなくてもいいよね。それからはご存知の通り、JKのコスプレをしたままで、
 桃田くんと会ってましたときさ」

「……………」

「いろいろ大変だったんだよ？ お弁当を作った日なんか、会社終わってから急いで駅の方に行
 行って、女子トイレで着替えた後にコインロッカーに荷物を預けたりして」

冗談めかして言って、くすりと笑う。

ああ、そうか。織原さんのスーツ姿——どこかで見覚えがあると思っていたけれど、ようやく既視感の正体がわかった。

弁当箱を届けようと、女子トイレに入った織原さんが出てくるのを待っていたとき、スーツ姿のOL風の女性が出ていくところが見えた。裏事情を知らないせいでまるで気づけなかったけど——あのとき見えたOL風の女性が、織原さんだったのだ。

JKからOLへと。

仮初の姿から本当の姿へと変貌した、織原姫だった。

「JKコスで街中歩くのは恥ずかしかったけど……でも、ちょっぴり、楽しかったな」

「……あ。やっぱりそういう趣味が」

「違うってばっ！ そうじゃなくて、桃田くんといるのが楽しかったって意味で……」

即座に否定を叫ぶが、声は段々と尻すぼみになり。

そして、みるみる顔が赤くなっていく。

「……俺といるのが、楽しかったんですか？」

「そ、そうよっ！ 悪い!？」

逆ギレ気味に怒鳴る。俺は思わず笑ってしまいそうになった。ああ、やっぱりこの人は織原さんなんだな。服装や髪型は変わってしまったけれど、表情や仕草しこうはなにも変わらない。俺が好きになった彼女、そのものだ。

けれど。

穏やかな気持ちとなる俺とは反対に、織原さんの表情は暗くなっていく。

「……楽しかったよ。若返ったみたいなのがして、学生時代に戻ったみたいな気がして、夢みたいに楽しかった——でも、もう終わりにしなきゃ」

もう魔法は解けちゃったんだからと。

どこか決意を感じさせる声で告げる織原さんは、もう笑っていないかった。

温度の感じない、人形めいた無表情となっている。

「じゃあ……そういうことだから」

強引に会話を打ち切るように言うと、織原さんは鞆かばんから財布を取り出した。

そして一万円札を一枚、テーブルの上に置く。

「ここは私が出すから。大人の私が」

「え……」

「なにか、好きなもの注文して食べてもいいよ。お釣りは……騙だましたお詫わびとして受け取ってください」

素っ気なく言い切ると、織原さんは席を立ち、早足で去っていった。

「……なっ。ちょ、ちょっと待ってくだ——あつ。す、すいません」

「慌てて追いかけようとしたところで、料理を運ぶウェイターとぶつかりそうになってしまう。そうこうしているうちに、彼女はもう店の外に出ていた。

追いかけるようにも食い逃げになってしまうので、とりあえずもらった一万円で急いで会計を済ませた。お釣りを握り締めて店を飛び出す。

「待って……待ってください、織原さん！ 織原さん！」

街頭が照らすアスファルトを蹴り、スーツの背中を追いかける。

何度か呼びかけると、彼女はようやく足を止めてくれた。こちらを振り返る。

「……なに？」

表情も声も——ゾツとするぐらい冷たかった。

「なにって……まだ話は終わってないでしょう」

「これ以上なにを話すっていうの？」

織原さんは問う。

射抜くように俺を睨みつけて、問う。

「まさか——まだ私のこと、好きだなんて言わないよね？」

悲痛な響きを帯びた声だった。口の端には皮肉めいた自嘲が浮かぶ。

「それ、は……」

言葉に詰まる俺を見て、彼女の美貌を歪ます自嘲と白虐が、より一層深くなる。

「わかっている……わかっているから。桃田くんが好きだって言ってくれたのは、女子高生の私——お嬢様高校に通うJKの『織原姫』でしょ？ 私とは違う……本当の私とは全然違う。きみが好きになったのは、27歳の私じゃない」

「……………」

「きみが好きになった女の子は、この世には存在しないの」

思い出す。

俺が好きになった彼女のことを。

同い年の女子高生と信じて疑わなかった、織原姫という名前の少女。

「私が27歳だってわかってたら、きみも最初から相手になんかしなかったでしょ？ 恋愛対象にはならなかったでしょ？ そうよね……当然よ。きみみたいな高校生からしたら、私なんてもうおばさんだもんね。ねえ、気づいてる？ 私、きみよりも、きみのお父さんと年が近いんだよ……………」

「織原さん……」

「ああ、ごめん。責めるつもりは全然ないの。悪いのは全部私の方だから」

言葉が見つかからない。頭がまだ、全然整理できていない。混乱が全く解消されない。グチャグチャになった頭で、それでも口に出さずにはいられなかったのは、

「俺達……もうこれで、終わりなんですか？」

未練、だった。

終わらせたくない。失いたくない。あらゆる理性を振り切って、そんな感情だけが俺の内側に暴れていた。

「終わりだよ。終わらせるしかないじゃない……だって、15歳のきみと27歳の私じゃ、住む世界が全然違うんだもん」

「そんなこと……。年が一回り違ったくらいで」

「くらい？」

織原さんは今にも泣き出しそうな顔で、しかし強い声で言う。

「わかってない。全然わかってないよ、桃田くんは。27歳がどういう年齢なのか、全然わかってない……」

瞳に深い悲しみを滲ませ、彼女は宣言する。

27歳という年齢の、絶望を――

「27歳はね――アナゴさんと同じ年なのよ！」

ポカン、としてしまった。

まるで予想してない方角からの攻撃に、思考がフリーズしそうになる。

「ア……アナゴさんって、あのアナゴさんですか？ あの、サザエさんの」

「そう。マスオさんの同僚の、アナゴさんよ。彼、公式情報だと、27歳らしいわ」

マジか。

アナゴさん、あの貫禄と声で、27歳だったのかよ。

あの雰囲気はどう考えてもアラフオーだろ。

「……大人になるとね、子供の頃憧れていたキャラクターより、自分がどんどん年上になっていくの。ナルト、一護、ルフィといった十代の主人公を超えて、いつしかぬ〜べ〜よりも大人になっていた。ジャンプ主人公達を追い抜いていく絶望にはどうにか耐えられたけど……アナゴさんが27歳とわかったときは、さすがにキツイものがあつたわ」

「……………」

「桃田くん、きみは、アナゴさんと付き合えるの？」

いや。

アナゴさんとは付き合えない。

シリアスな顔でなに言ってるんだ、この人。

「ほらね、無理でしょ」

いや。

ほらね、じゃねえよ。

どうしょ。これは……ツッコんでいいところなんだろうか。今はシリアスパートとギャグパート、どっちなんだ？

判断に困る俺を無視して、織原さんは一人話を進める。

「最初から『ウィー』で遊んでたきみと、『スーフアミ』のソフトを一生懸命フーしてた私とじゃ、どうやったってわかり合えないのよ……。どうせ桃田くん、アレでしょ？ 『アドバンス』だって横に長いやつじゃなくて、パカパカ折り畳める『SP』の方で遊んでたんでしょ？」

「……俺、『アドバンス』はやってなくて。携帯ゲームは普通に『DS』から」

「さ、最初っから『DS』世代……！」

織原さんは白目を剥き、大きくよろめいた。

気絶寸前である。

「……も、もうわかったでしょ？ 最初から『DS』で遊んでたきみと、思春期を『ロックマンエグゼ』に捧げた私とじゃ、住む世界が違うの。だからお願い。私のことは、もう忘れて」
そう言い捨てると、織原さんはこちらに背を向けた。

遠ざかっていく背中を、やはり俺は見送ることができなくて。

「ま、待って——」

「——あーあ！ わっかんないかなあ!？」

未練がましく呼び止めようとすると、突如、呆れ果てたような叫びが響いた。振り返った彼女は、心底不愉快そうな顔をしていた。見たこともない表情だ。

「こつちが気を遣ってるのわかんない？ いい加減、空気読んで帰ってくれないかな？」

刺々しい口調で、突き放すように言う。

「私、きみのことなんてなんとも思っただけ。反応が面白かったから、JKのフリしてかかってただけ。こつちはさ、大人の女なのよ？ 自分でお金稼いだこともない高校生なんて、最初っから男として認識してないの。ちよつと優しくしたぐらいいで、勘違いしないでよね」

小馬鹿にするような言葉は止まらない。

悪女の笑みを浮かべて、俺達の思い出を汚していく。

「ていうか、告白が『ラウワン』とかあり得ないから。ダサイにもほどがある。こつちは大人の女なんだから、もつとムードつてものを考えてくれないとね。たとえばほら、遊園地を貸し切って、お城の前で花束持って現れるとかさ。大人の女は、そういうのに気が利く男じゃないと——」

「……なんで、そんなこと言うんですか」

俺は言う。

痛い。胸が痛い。痛くて痛くてたまらない。

彼女の台詞で心を傷つけられた——わけじゃない。

「なんで——嘘つくんですか？」

彼女にこんな台詞を言わせてしまうことが、辛くて辛くてたまらなかった。

「な……う、嘘じゃ」

「だったら、なんで泣いたんですか？」

ハッと織原さんは息を呑む。

「俺が告白したとき、なんであんな風に泣いたんですか」

本当に申し訳なさそうに、心から罪を悔いるかのように。

今ならあの涙の意味がわかる。あの瞬間、織原さんは深い自己嫌悪に陥ったのだろう。俺を惚れさせてしまったことに、激しい罪悪感を覚えたのだろう。

「無理して、悪女みたいな演技しないでください。織原さんがそういう人じゃないって、俺はわかっているから」

「……きみに、私のなにがわかるの？」

「わかりますよ、好きになった人だから」

俺は言った。

出会ってまだ一週間かそこらで、相手のことなんて知らない方が多いだろう——でも、知っている。織原さんが他人を誑かして楽しむような性悪女ではないことぐらいは、ちゃんとわかっている。

俺を騙したことで心を痛めていたことも、十分過ぎるほど伝わっている。

無理をしたような悪女の演技はあまりにわかりやすくて——俺から嫌われようとしていることがあまりに明白で、反論せずにはいられなかった。

彼女の優しさだということはわかっている。

でも俺は、そんな嘘に騙されるほど子供ではなく——そして、そんな嘘に騙されてあげられるほど大人ではなかった。

大人でも子供でもなく、大人でも子供でもあるような、15歳の高校生が、俺だった。

「織原さ——っ」

言葉が止まる。

彼女が——泣いていたから。

すっかりと暗くなった夜の世界で、外灯の光を浴びながら、静かに静かに涙を零す。泣いている顔を見るのは、これが二度目だった。

「やめて……やめてよ、桃田くん……お願いだから、これ以上、私に入ってこないで」
ああ。

また、だ。

また、泣かせてしまった。

好きになった人を、守りたいと思った人を、俺のせいで泣かせてしまっている。

どうして、こうなってしまうのだろう——

ポロポロと涙を零しながら、鼻をすすりながら。

それでも織原さんは、まっすぐ俺の方を見た。

「……お願い、桃田くん。こんな変なおばさんのことはもう忘れて。もつと普通に、同じぐらいの年の子と、ちゃんと普通の恋愛をして。大丈夫。桃田くんならきつと、すぐにかわいい彼女ができるよ。だから」

ばいばい。
と。

そう言つて織原さんは——笑つた。涙でグチャグチャになった顔で、それでもとびきりの笑顔を見せてくれた。悲しみも痛みもなにもかもを押し殺して、ただただ俺の幸福な未来だけを祈るような、聖女のように優しく、気高く、美しい笑み。

背を向けて、俺の前から去っていく。

動けない。足が縫いつけられたように動けない。どれだけ冷たくされても、どれだけ罵倒されても追い縋ろうと思つていたらけれど、あんな笑顔を見せられてしまつては、もうなにもできない。

俺は天を仰ぎ、必死に涙を堪える。

夜空に浮かぶ月は、ムカつくぐらい綺麗だった。



「27つて……ババアじゃねえか」

放課後の空き教室。

世の中にいるアラサー女性の全てを敵に回すような台詞を言ったのは、もちろんウラだった。死んだ魚のような目をまんまるにして驚いている。

隣のカナもまた、同じような驚き顔だ。

「さすがに驚いたね。桐女の制服で歩いてるところか別の高校の生徒だとばかり思つてたけど、まさか『はるみ生活』で働くOLさんだったとは」

言いつつ、カナは手元のプリクラを眺める。俺達二人のプリクラだ。織原さんが落としていった分も合わせて、なし崩し的に俺が二人分所有している。

「これ見ると、とても27歳には見えないなあ。普通に……いや、かなりかわいい女子高生にか見えない。プリクラつてことを差し引いても、かなりの童顔だね」

「けっ。女は化粧でどうとでもなるからな。怖えー怖えー」

皮肉げに言つた後、ウラは俺の方を見て笑う。

「でも——助かったな、モモ」

「え……」

助かった？

「危く、一回りも年上のババアと付き合っちゃまうところだったんだろ。相手が良識ある大人でよかったよ。もしも若い男を弄もよぼんで誑あざわかそうとするカス女カスメだったりしたら、今頃なにされてたかわかんねえぜ？」

助かった——そういう見方もあるのか。

あるいは、そっちが普通の考えなのかもしれない。

これがもし男女が逆で——15歳の女子と27歳の男が恋愛関係になったという話になれば、否が応でも犯罪っぽい空気が発生する。たとえそれが純愛だったとしても、世間に理解してもらうことは難しいだろう。

男女が逆になったところで——本質的には同じだ。

成人女性と未成年男性が男女の関係になることは、法律上は淫行いんぎょうに当たる。

あるいは俺も、今のウラの立場だったら、同じことを言うのかもしれない。

友達か街で出会った女性に惚れて、相手が実は27歳の社会人だとわかって、それでも構わず告白して玉砕したとなれば——助かったな、とそう言うのかもしれない。万が一にも付き合ふようなことになれば、どれほどの困難が押し寄せるか想像もつかないから。

昔の俺ならば、たぶんそう言っただろう。

彼女と出会う前の俺ならば——

「まだ、未練タラタラって感じだね、モモ」

見透かしたような目をして、カナが言った。

「まだ姫ちゃんのこと……あ、もう姫ちゃんなんて呼べないか。訂正しよう。まだ織原さんのこと、全然諦あきらめきれないみたいだ」

「は？ おいおいマジかよ、モモ。相手、27だぞ。アラサーだぞ、アラサー。学園ラブコメだったら、バカの一つ覚えみたいに『婚期がく、婚期がく』って騒いでるだけの先生ボジになる年齢だぞ？」

だからなぜお前は不特定多数を敵に回す発言をする。かわいい先生ヒロインだって世の中にはたくさんいるぞ。

「……別に、未練ってわけじゃねえよ」

俺は言う。

「ただ、まだ頭が全然整理できてないだけだ」

ふわふわとした夢見心地で、地に足がついてない感じ。

昨日、全てが終わったはずなのに——関係は完全に消滅してしまっただけなのに、それをまるで受け止められずにいる。

「モモ。僕にしては珍しく善意100%で言うけどさ——やめておいた方がいいよ」

カナは爽やかな笑みを消し、いつになく真剣な顔となっていた。
 「彼女のことは、早く忘れた方がいい。悪い夢でも見たと思つて、早くこっちの世界に帰っておいで」

「……………」

「モモのためだけに言つてるんじゃないよ。織原さんのためにも、彼女のことはさつさと忘れて次の相手を探した方がいいと思う」

淡々と、静かな声で論ずるように続ける。

「27歳つていったら、大学卒業後に新卒で働き出したなら、もう入社六年目……立派な社会人だ。カート・コバーンやジミ・ヘンドリックスなら、一時代を築いてすでに死んでるような年齢だよ？」

「……伝説的なミュージシャンと比較されてもな」

「要するに、僕らみたいなガキとは根本的に住む世界が違うつてこと。付き合つたつてお互いのためにならないと思う。人によっては、結婚や出産を考え出す年代だしね。生半可ななまはんか気持ちで近づくべきじゃないよ」

結婚。出産。

遠い国の言語を聞かされている気分だった。薄っすらとは理解していながら、俺にとつてはまだまだ先の事柄だと思ひ、考えることすらしなかつたこと。

「つーかシンプルに、一回り年上つて、ありえねえだろ。いつまでも外見が変わらないロリババアとはワケが違うぜ？」

ウラが口を開く。

「確かに織原は、今は若くて綺麗に見えるかもしれないけど、モモより早くババアになつてくんだ。いつまで付き合う気かは知らねえけど、お前が20歳になつたら32歳、お前が30歳になつたら42歳……年の差は一生縮まらない。今のモモは恋愛脳で舞い上がつてるから『愛があれば年の差なんて』つて考へてるかもしれないけど、いつかその熱が冷めたとき、お前は自分より12も年上の女を、どう思つのかな？」

ウラも、カナも、いつになく厳しい口調だった。

その厳しさを——ありがたいと思う。

他人の恋愛をけしかけるのは簡単だ。「絶対いけるよー」「あの子も絶対お前のこと好きだから！」なんて無責任に相手を応援するのは、本当に簡単だ。

でもこいつらは、真剣に俺のことを考へてくれている。俺から嫌われることも覚悟した上で、俺の身を案じてくれている。

「……サンキューな、二人とも。お前らの言うとお前だ。おかげで目が覚めたよ」

俺がそう言うのと、二人は安堵したように表情を緩めた。

「よしモモ。今日はパーツと遊ぼうぜ。僕んちでひたすらゲームしてよう。ソシヤゲやつて据

え置きゲーやってカードゲームやってボードゲームやるう」
 「パーツと遊ぶがインドア過ぎるでしょ。モモ、こういうときは次の出会いだよ。合コンしよ
 うよ、合コン。僕が本物の桐女の子を集めてあげるから」

「ふざけんな、モモは僕とゲームすんだよ」

「なに言ってるの？ モモは僕と合コンするんだ」

「ゲームっ」

「合コンっ」

「……落ち着けよ、お前ら」

なぜか言い争い始めた二人を、溜息ためいき混じりに制す。

「合コンは……やめとくよ。そんな気分じゃないからな」

俺は言う。

「とりあえず今は、ゲームだな」



「織原さん、織原さん……織原チーフっ」

「え。は、はいっ」

名前を呼ばれたことに気づいて、ハッと顔を上げる。

「後輩の小松こまつさんが心配そうに私の顔を覗のぞいていた。

「大丈夫ですか？ なんかボーツとしてましたけど」

「ご、ごめんね。なんでもないから大丈夫」

「これ、頼まれてた資料、まとめておきました。目を通してください。あと、体調不良なら
 言ってくださいね。織原さん、ここ最近、ちょっと調子悪そうですし」

「う、うん。心配してくれてありがとう」

小松さんは自分の机に戻る。

彼女は確か、今年で23歳だったかな。緩くパーマを当てた茶色い髪に、白を基調としたオ
 シヤレなオフィスカジュアルよまおの装い。毎日コーディネートを考える手間とプレッシャーに負
 けてスーツで出勤している私とは違い……なんていうか、キャピキャピしてる。私が男だつた
 らああいう子に惚れるなあ、つて思う。

眩まぶしい。若さが眩まぶしい。

23歳の女の子を見ている、若さが眩まぶしくて目が眩くらみそう。

だから。

15歳なんて、もはや太陽そのものだ。

手が触れる距離まで近づけば、身も心も焼き尽くされ、ドロドロに蕩とろけてしまふ——

「……………」
顔を上げて、改めてオフィスを見渡す。

国道に面したビルの三階。ガラス張りの窓からはそれなりの景色が楽しめるけど、五年も働いてればい加減見飽きてくる。パソコンが置かれた机がずらりと並び、椅子の色はなぜかアップルグリーン。多くの同僚達が、忙しなく自分の業務に従事している。女性が多い職場なせいかな、なにかとオシャレな小物が多く、オフィス全体が華やいだ雰囲気にも包まれている。

ここが、私の職場。
ここが、私の現実。

二年前からマーケティング事業本部に配属され、今では一つのチームのチーフを任されている。チーフといえば聞こえはいいけれど、結局はただの中間管理職。それもかなり下っ端の方の。やりたい人が他にいなかったから私がなっただけ。給料は大して上がらないのに責任と仕事ばかりが増える、やーな立ち位置である。

眼鏡越しのオフィスは、いつもとにも変わらない。

それなのにどうしてか——今は少しだけ、色褪せて見えてしまう。

「……………」

桃田さんと最後に会ってから、もう一週間が経過していた。

社会人である私はその後も毎日変わらず、仕事に終始していた。恋愛のあれこれで落ち込ん

だぐらいで会社を休むわけにはいかない。

と、頭ではわかっているのだけだ。

実際にはさっぱり割り切れていない。就業中も上の空になっていることが多くて、さっきみたいに体調不良を心配されたことは、一度や二度じゃない。

「……しつかりしなきゃ」

誰にも聞こえないよう、小声で呟く。ヌルくなり始めたコーヒーを一気に飲み干し、パソコンの画面に集中。目の前の仕事に没頭する。

私には傷つく資格も落ち込む資格もない。

悪いのは全部私なのだから。

私の軽はずみな悪ふざけのせいで、一人の男の子を深く傷つけてしまった。

許されることではない。一生後悔しながら生きていこう。

もう、夢は終わった。

もう、魔法は解けた。

これから先は、ずっと現実だけが続いていく。

昼の休憩に、私は会社の外に出た。

うちの社員の昼食模様は人それぞれで多種多様。作ってきたお弁当を食べる人もいれば、外に食べに出る人もいる。オフィス街だけあって飲食店は充実しているし、最近は『ウーバーイーツ』なる宅配サービスが女子社員の中では流行っている。

私は節約と健康のために自分でお弁当を作るようにしているけれど、今日は人との約束があった。

会社の近くにある、シックな雰囲気と野菜のパスタが売りのカフェに入る。昼時の混み合った店内を見渡していると、

「姫っ！ こっちよー！」

店内の奥の方で、黒髪の美人が私の名を呼んだ。カア、と頬が熱くなるのを感じた。私は小走りで駆け寄って、対面に腰掛ける。

「もうっ、雪ちゃん……大声で下の名前で呼ばないですよ！」

「あら。ごめんさい、うっかりしてたわ」

素直に謝ってくれるけど、あまり表情は変わらない。艶やかでサラサラな長い髪と、新雪みたいに真っ白な肌。顔立ちは精巧に作られた人形のように美しく、その凛とした佇まいは一輪の薔薇を思わせる。クールビューティーな出で立ちは高校時代からなにも変わらず、とても一児の母とは思えない。

井口雪。

もとい——今は結婚して、白井雪。

大学卒業後は銀行員をやっていたけれど、結婚と同時に辞めて、今は専業主婦。

高校時代から親交がある、私の友人の一人。その類まれなる美貌ゆえ、学生時代から男女問わずに人気が高かった。地味に地味に生きていた私とは対極に存在するような相手だったけど、いろいろと奇妙な縁があり、今でも定期的に会っている。

「未だにコンプレックスなのね、その名前」

「当たり前でしょ……っていうか、年々コンプレックスが酷くなってるよ」
姫っ。

そんな名前が許されるのは、せいぜい十代だろう。

アラサーにもなつて姫っ……ねえ？

「オタサーの姫ならぬ、アラサーの姫というわけね」

「……ごめん、雪ちゃん。あんまり面白くない」

「あら残念」

美人過ぎて近寄りやすい雰囲気纏っている雪ちゃんだけど、意外としようもない冗談を言ったりもする。外見から誤解されやすいけれど、中身は意外とユーモラス。

「私……このままじゃお婆ちゃんになつても姫なんだよ？ 老人ホームに入つたら、『姫お婆ちゃん、ご飯ですよ』とか言われちゃうんだよ？ はあ、鬱だわ」

「同情するわ。親はもつと、考えて名前をつけるべきよね」
雪ちゃんはそこで、物憂げな溜息を漏らす。

「最近、地域の子育て支援センターなんかにも参加してるんだけど……冗談みたいな名前の子が多すぎてゾツとするわ。あの親達は、子供をペットかなにかと勘違いしてるのかしら？ 根本的に想像力が欠如して^{けつじょ}いるのよ。いずれ子供が大人になり、最後は老人になるということ、全然想像できていない」

棘のある言葉だったけど、名前にコンプレックスがある身としては同意したい。
ただ……一つだけ物申したいこともある。

「雪ちゃん、そういえば、今日は子供はどうしたの？」

「真華龍なら、お母さんに預けてきたわ。たまには孫にも会わせてあげないとだからね」

「……そっか」

真華龍——雪ちゃんの子供の名前。

最近一歳になったばかりの男の子で、私も何度か会わせてもらったことがある。もうメチャクチャかわいい。よちよち歩いて『まんま、まんま』って言う様子がブリティ過ぎて、動画や写真を撮りまくってる。

人の子だけど、目に入れても痛くないぐらいかわいい……だけど、名前は真華龍。
言っちゃなんだけど、めっちゃペットっぽい名前じゃない？

「改めて思うけど……真華龍くんって、だいぶ攻めたネーミングだよね」

「ええ。ギリギリいっぱいを攻めたと自負するわ。よくこんな個性的でセンスフルな名前を思いついたと、自分で自分を褒めたい気分よ」

私の感覚ではギリギリいっぱいどころか、投げたボールがスタンドに直行したレベルの大暴投な気がするけど……まあ、なにも言うまい。

雪ちゃんって昔から、こんな感じなのよねえ。

東北一偏差値が高い大学に入るくらい頭いいのに、なにかが致命的にズレている。

高校時代は常に学年トップの成績を収め、東北一の大学にも余裕で入学。卒業後は日本有数のメガバンクに総合職として入社。

しかし、たった一年で寿退社して、それ以来専業主婦。

結婚も寿退社も、傍から見れば信じられないくらい即断即決だったので、当時はいろいろ心配もしたけど、こうして今、立派に専業主婦をやっている彼女を見ると、心配は全部杞憂^{きゆう}だったのだと実感する。

「……はあ」

「どうしたの？ 溜息なんかついちゃって」

「いや……なんか、雪はちゃんとしてるなあ、って思って、結婚して、子供もいて、なんていうか……ちゃんとしてる気がする」

27歳にもなると、同級生がどんどん結婚していく。子供がいる人も多い。すでに離婚を経験してシングルマザーとして生きている知り合いもいる。

「それに比べて、私はなにやってるんだらう……」

「ほんとよね」

悲しいことに雪ちゃんは慰めてくれず、思い切り同意してきた。

「JKのフリして、15歳の男子を誑かしてるんだもの。本当になにをやってるの、あなたは？ いい年して恥ずかしいと思わないの？ ご両親に申し訳ないと思わないの？」

「う、うう……は、半分ぐらいは雪ちゃんのせいでしょう」

あの日——授乳期間が終わって飲酒が解禁になった雪ちゃんは、相当なハイペースで飲んでた。旦那さんは子供を連れて実家へと帰り、「たまには育児も主婦仕事もお休みして、のんびりしなよ」と言ってくれたらしい。

久方ぶりの飲酒と休日を満喫する雪ちゃんに付き合った私は、大して強くもないくせに相手に合わせてグビグビ飲んじゃって——それが後に続く、奇妙な日々の始まりだった。

「もうお別れを告げたのよね？ その、桃田薫かほるさんとやらには」

「……うん」

注文していた料理が、ようやく運ばれてくる。お店の看板メニューである、日替わりのパスタ。キャベツとシラスがふんだんに混ぜ込まれたパスタを食しながら、私は雪ちゃんに説明した。



私と彼の、事の顛末を全て。

「そう。結局、全部打ち明けてしまったのね」

話を聞き終えた雪ちゃんは、感情の読めない無表情のまま、じっと私を見つめる。

「お疲れ様、姫。辛かったでしょう」

「雪ちゃん……」

「——なんて言わないからね」

視線が、氷でできたナイフみたいに鋭くなる。室温が一気に下がった気がした。蛇へびに睨にらまれた蛙かえるみたいに、私は硬直してしまっ

「私は何度も言ったわよね？ 今すぐに彼と関わることはやめなさい、って。取り返しのないことになるから、って」

「……っ」

桃田くんに出会った日から、私は雪ちゃんに相談を持ちかけていた。「ど、どうしよう雪ちゃんっ！ JKの電車が痴漢で男の子が超格好良く助けてくれたけど、私JKだったっ！」と、大慌てで変な電話をしてしまった。

「なにもかもあなたが悪いわよ、姫。お礼までならいいと思うけど、デートなんかするべきではなかった。まして自分から誘うなんて……愚かにもほどがあるわ」

私はなにも言い返せない。

デートのきっかけとなった、私が預けっぱなしにしていたお弁当箱——

本当は——気づいていた。

気づいていたけど、忘れた振りをした。並んで歩きながら、このまま彼が気づかなければいいのに、と心の中で願っていた。祈るように願っていた。

シンデレラの靴と同じ。

忘れものがあれば、次に会うための口実になると思ったから。

「こうなることは目に見えていたわよ。あのJKコスをしたあなたと一緒にデートなんかしたら、男なら誰でもコロッと落ちるに決まってるから」

「……そ、そんな、まさか」

「姫はモテた経験がなくて、男性経験も皆無だから、自分の魅力に自覚がないのよね。まあ、しよがないとも思うけれど。学生時代のあなたは、地味でオタクで三つ編みで、そしてデブだったし」

「デデデッ、デブじゃないから！ ちょっと重心が安定してただけだから！」

必死に反論するも、虚しいだけだった。

高校時代の私は、雪ちゃんの言うとおり地味でオタクで三つ編みで、そして……ちよつぷりぱちちやりだった。今だと「陰キャ」っていうのかな？ クラスの隅っこでいつも本（ゲームの攻略本）を読んでいた。女友達はいたけれど、同年代の男子となんか一度も話さずに三年間

が終わった。

ひたすら家でゲームをやってる、灰色の青春だった。恋愛なんて自分には縁遠いものだと思って、諦めていた——でもそれは、無関心とは違う。本当は興味があつた。街を歩く学生カップル達に、ずっと憧れていた。

恋がしたいと、ずっと思っていた——

「『振り袖だけは太つたまま着たくない』といってダイエット始めたときはどうせ無理だと思っていたけど、よくやり遂げたわよね」

「おかげさまで」

成人式前のダイエットには雪ちゃんにもかなり協力してもらつた。体型は今も、どうにか維持している。

「お腹周りはすっきりして綺麗なくびれができたのに、胸だけは一切痩せなかつたのよね。本当、嬉しいわ。なにその犯罪級のおっぱい」

「や、やめてよ、もうっ」

じつと胸を睨まれたので、慌てて隠す。

いやあほんと、おっぱいだけは全く痩せなかつたんだよね。不思議不思議。

「桃田くんは、そんな胸を至近距離で見せつけられたわけでしょ？ そりゃ惚れるわよ。JKの格好してそのおっぱいをブルンブルンさせられたら、思春期の男子にはたまつたもんじゃな

いわ」

断言する雪ちゃん。そ、そうなのかなあ。ぶっちゃけ……桃田くんも私の胸は、しょっちゅう見た気がするけど。うん、まあ……結構な頻度で。

「自覚しなさい、姫。あなたは——15歳の男子を誑かしたのよ。あなたの持つ女としての魔性で、男心を弄んでしまったの」

糾弾の言葉が胸を射抜いた。

「あなたは自分の学生時代のコンプレックスを払拭するために、桃田くんを利用したのよ。味で冴えなかつた青春時代をやり直すために、彼の純情を利用した」

「そ、そんな——」

違う、と言いたかつた。言えなかつた。

雪ちゃんの言うとおりのなのかもしれない。

あの日曜日のデートは——私が高校時代にやりたくてもできなかったことをやっただけだった。二人で制服のまま出かけて、街をぶらぶらして、安価なチェーン店で一緒にハンバーガーを食べて、『ラウン』で遊んで、『プリクラ』を撮って——

本当に楽しかつた。

青春時代をやり直しているみたいで、本当に楽しかつた。

そう——全ては、私の自己満足だ。

私は、私のことしか考えてなかった。

「だって……だって、しょうがないじゃない——好きになっちゃったんだから」
言い訳するみたいに、私は言った。

好き。

桃田くんが好き。大好き。

彼は私に一目惚れしたと言ってくれたけど——それはこっちの台詞だ。

一目惚れだった。

というか。

あんな格好いい真似^{まね}されて、惚れないわけがないでしょ。

絶対絶命のピンチから私を救い出してくれた彼が、私には王子様に見えた。

格好よくて、優しくて、一瞬で恋に落ちてしまった。

「こんな気持ちになったの、生まれて初めてで……頭の中が桃田くんのことだけでいっぱいになっちゃって、もうどうしていいか全然わかんなくて——でも、絶対に付き合えないことだけは、ちゃんとわかってたから……」

相手は15歳の少年。

27歳の私と結ばれるはずもない。結ばれていいはずもない。

私の初恋は——禁断の恋だった。

ロミオとジュリエットのように、禁断だった。

「だから……せめて、少しだけでいいから、一緒にいたかった。恋人っぽいこと、してみたかった……一回だけデートしたら、きちんとお別れして、もう二度と会わないようにしようと思ってた」

——私、一生の思い出にするね。

叶^{かな}わぬ初恋ならば、せめて思い出が欲しかった。一度でいいから、二人で街を歩いてみたかった。学生っぽいデートを試してみたかった。それさえできたなら、もう思い残すことはない。この気持ちは心の奥底にしまい込んで、いつか風化するまで必死に隠しておこうと決めていた。それなのに——

「それなのに、最初で最後のつもりだったデートで、熱烈な告白をされちゃったというオチね。今時の男子にしては、なかなか行動力があって男前なのね、桃田くんって。さすがが惚れるだけあるわ」

痛烈な皮肉を投げつけられ、私は返す言葉もない。

——好きです、織原さん。

嬉^{うれ}しかった。

本当に嬉しかった。天に昇る気持ちだった。好きになった相手が、自分を好きでいてくれた。好きって気持ちを言葉にしてくれた。この世にこれ以上の幸福はないと思った。

でも。

それ以上に悲しくて辛くて、罪悪感で心が押し潰されそうだった。

「……雪ちゃんの言うとおりだよ。私は桃田くんのこと、悪戯に弄んで、傷つけただけだった。自分のことだけで手一杯で、相手のことなんかにも考えてなかった。雪ちゃんに言われたとおり、とっとと彼の前から去るべきだった……」

そうすれば桃田くんも、私なんかにも振り回されることはなかったのに。あんなにも優しくして男らしい少年の心に、私は深い傷を与えてしまった——

零れそうになる涙を必死に抑えていると、雪ちゃんがいきなり席を立った。なにも言わずに私の隣に座ると——ギユ、と抱きしめてきた。

「え、な……ゆ、雪ちゃん?」

「おー、よちよち。つらかったでちゅねえ」

急に抱き締めてきたかと思えば、赤ちゃん言葉を使い出した。普段からは想像もつかない甘い声で囁きながら、回した腕で頭を撫でてくれる。

「よちよち。姫ちゃんは、いい子でちゅよー」

「……なに、それ? 私、真華龍くんじゃないよ?」

「赤ん坊と一緒に、今のあなたは。おー、よちよち。だいじょうぶでちゅよー」
痛い痛いのとんでけー。

と、雪は言った。温かい優しさに包まれて、涙が溢れてくる。

「……う、うう……ひいん」

人目もはばからずに赤ちゃん言葉を使ってくる雪の腕の中で、私は人目もはばからずに泣いた。27にもなったというのに、赤ん坊のようにワンワン泣いた。

やっと涙が止まった後……さすがに周囲の視線が気になったので、私達はそそくさとカフェから出た。雪の方は全然平気そうだったけど、私が無理。あーあ、しばらく来られないなあ、このカフェ。

雪と別れて、会社へと戻る。

さあ、午後からは気合いを入れて頑張ろう。月末の企画会議に向けた資料作りと、新商品に関する市場調査、営業部に渡すデータ作成、取引先とのスケジュール調整、チームメンバーにもきちんと仕事を振り分けなきゃならない。ああ、そうそう、来週太田さんが育休を終えて帰ってくるから、彼女用のマニュアルも作っとかないと。

仕事は山積みだ。

こうして仕事に忙殺されていれば——いつかは桃田くんのことも忘れられるだろうか。

「……………」

雪のおかげで少し気持ちが軽くなっただけれど、心はまだまだ晴れない。未練と罪悪感が全身を雁字搦めにして、足取りを重くする。

ふと——最近よく言われる台詞が頭をよぎる。

『いつか白馬に乗った王子様が現れると思ってるの？』

27にもなって彼氏もなく、そして彼氏を作る努力もしていないと、親や友達からよくこんなことを言われた。

現実には王子様なんていない。自分から動かなきゃ、絶対に彼氏や結婚相手なんか見つからない。そんなニュアンスの皮肉なんだろう。

でもね、みんな。

王子様、現れたよ。

なんの努力もしていない私のところに現れて、颯爽と私のことを助けてくれて、しかも私なんかのことを『好きだ』と言ってくれた。

優しくて格好よくて男らしい、最高の王子様。

でも、残念ながら、一回りも年下だったけど。

ああ——桃田くん。

あなたはこうして、15歳なの？

私はどうして、27歳なの？

もしも私が15歳の高校生だったなら。

もしもあなたが27歳の社会人だったなら。

私達はなんの障害もなく、一緒になれたのかな。

そして二人はいつまでも幸せに暮らしましたとさ——という締めめの文句で終わるような、ありきたりな物語を歩むことができたのかな？

「……………」

あー、まずい。また泣いちゃいそう。最近、いい加減泣きすぎだ。この一週間、毎晩一人で晩酌しては号泣し、気がつけば朝という最高に自堕落な生活をしているのに、ちっとも涙は枯れてくれない。

ハンカチを取り出そうと鞆を開き——そこで、気づいた。

サイレントモードにしなければなかったスマホに、メッセージが届いてくる。

一週間ぶりの、桃田くんからの連絡だった。



残業が少ないのが、うちの会社のいいところ。

大きな会議や特別な業務、もしくは誰かが大失態でもやらかなさき限り、大体は定時に帰れ

る。友達からは「羨ましい」「いい会社だね」って言われるけど、定時で帰れる会社が『いい会社』と呼ばれるこの国は、果たして大丈夫なんだろうか。

会社を出た私は、指定された場所へと向かった。

一秒でも早く駆けつけたいという気持ちと、できることなら会いたくないという気持ちが絡まり合い、結果として競歩と牛歩をランダムに繰り返すような、実に気持ち悪い歩き方をしてしまう。

そうしてたどり着いたのは——駅から少し歩いたところにある、高架下の公園。

ベンチと砂場ぐらいいかない、少し寂れた公園だ。

出会った日の翌日に、彼が私のお弁当を食べてくれた場所。

いつの間にかすっきり日が暮れていて、ポツポツと点在する外灯だけが、夜の公園を照らす光源となる。

薄暗い景色の向こうに、桃田くんが見えた。

ベンチに座る彼が目に入った瞬間、ズキリ、と胸が痛む。自分にはこんな痛みを感じる資格などないとわかっていても、切なさで胸が張り裂けそうになってしまう。

「……っ」

ギユ、と唇を噛み締めた。ちゃんとしろ、私。毅然としてなきやダメだ。ほんの少しでも未練がある素振りを見せちゃいけない。とつくに吹っ切って前に進んでいる——そんな大人の

女を演じよう。

数回深呼吸吸した後、背筋を伸ばし、大股でカツカツと歩く。

一気に近づき、断りもなくベンチの反対側に座って、

「こんばんは」

と素っ気なく言った。

できる限り、冷たい声で。

「織原さん……こんばんは。お久しぶりです」

桃田くんは私の方を見ると、嬉しさと気まずさが綱い交ぜになったような、複雑な表情を浮かべた。

「来ないかと思ってました。来てくれて、ありがとうございます」

「別に。来なきやいつまでも待ってるっていうから、仕方なく来たただけだから」

感情を押し殺し、必死に平静な声を出す。

「それで——用事ってなに？」

「お金のことです」

桃田くんは言った。

予想もしなかった答えに、私はきょとんとしてしまう。

「こないだファミレスで、織原さん、一万円も置いてったじゃないですか」

「ああ、そのこと」

今日はまさか、そのお金を返すために私を呼び出したのだろうか。律儀な桃田くんならありえそうだけど、なんだか拍子抜けした気分。少しがっかりしてしまい——がっかりしている自分がいたことに驚く。

「恥ずかしいことに、情けないことに、私はまだこの子になにかを期待していたらしい。

ありえるはずもないのに。

私達二人の間になにかなあって、ありえるはずもないのに。

「あれは迷惑かけた慰謝料って言ったでしょ？ 返してくれなくても大丈夫だから。なにか好きなものでも買って」

「はい。だから——好きなもの買いました。一応、その報告しようかと思って」

「……え、あ。そうなの？」

意外。てっきり返してくる流れなのかと思っただら、もう使ってたなんて。

「あのお金で、ゲーム買いました」

「ゲーム……？」

「この一週間、ずっとゲームだけやってました」

「そ、そう」

むう……。

別にいいんだけど。あげたお金をなにに使おうが勝手だけど。私がこの一週間、大好きなゲームも手につかないぐらい落ち込んだことと、桃田くんが一人で楽しくゲームを満喫してたことは、ちつともちつとも関係ないことだからどうでもいいんだけど……むう……。

身勝手な怒りにとらわれてしまう私だったけれど、

「このゲーム、ずっとやってました」

桃田くんがブレザーのポケットから取り出したものを見て——息を呑む。

驚愕と、郷愁。

な。

な、な。

懐かしいい……。

なにこれ、すっごく懐かしい！

ノスタルジーの花が胸いっぱい咲き誇る。

これは……制服のポケットにも簡単に入るぐらい収納性に優れた小型のこれは——

「ゲームボーイアドバンスSP……！」

桃田くんが見せてくれたのは、とっくに製造が中止されている前時代のゲーム機だった。

『アドバンス』の上位機種として発売されたハード。液晶自体が光るフロントライト機能が當時は大変画期的で、暗いところでも快適にゲームがプレイできた。あと、電池じゃなくて完全

充電式っていうのも、「ええ〜っ、もう単3電池買わなくていいの!」と感動した記憶がある。ハイスペックでナイイデザインなハードなんだけど、一年後ぐらいに『DS』が出てきちゃったせいで、すぐに市場から消えてしまったイメージがある。

「ど、どうしたの、これ? なんて桃田くんが、こんな懐かしいものを……」

「買ったんです。『ロックマンエグゼ』、やってみたくて」

パカ、とSPを開く。

電源を入れると……すごく懐かしいメロディーが聞こえてきた。うわあああ。懐かし過ぎて涙が出てきそう。はあ、『無印』のオープニング画面だあ。フロントライト機能がある『SP』だから、こんな薄暗い屋外でもしっかり画面が見えるよお……。

「この一週間、寝る間も惜しんでやって、一応クリアしました。いやあ、メチャクチャ面白かったですね! 最初は昔のゲームだと思ってナメてたこともあったんですけど、すげえハマっちゃいました。9マス対9マスという独自のフィールドと、チップを用いたバトルシステムが本当に楽しい。あとストーリーもすごくかかったなあ。最初は小学生の主人公が小さな事件解決するだけだったのに、段々と世界を巻き込む壮大な話になって……。まさかロックマンの正体が(ネタバレ)だったなんて」

嬉々として、本当に楽しそうに語る。わかる。わかるわかる。そうそう、すごいので、『エグゼ』は本当に面白いの。私の青春そのものなの!

「俺、ロックマンなんて、『スマブラ』でしか知らなかったんですけど、こんなゲームも出てたんですね」

「あー、『スマブラ』のロックマンは本家のロックマンだから、またちょっと違うんだけどね。『エグゼ』は割と外伝的な作品で——じゃなくて」

あまりの懐かしさにテンションが上がってついつい語り出しそうになってしまったけれど、どうにか自制して話の筋を戻す。

「どうして桃田くん? どうして、こんな古いゲームを……」

「織原さんがハマったゲーム、やってみたかったんです。中古屋探し回って、どうにか1から6まで全部揃えたんで、これから順番にやってみようと思います」

「……なん、で? なんて、そんなこと」

「織原さんに——少しでも近づきたかったから」

と言つて、桃田くんは『SP』を閉じる。でも……『SP』は『DS』と違って閉じただけでスリープモードになったりはしないので音楽が鳴り続けた。慌ててスイッチを下げて電源を落とす桃田くん。『DS』世代らしいミスだった。

「えっと……織原さん、言つてたじゃないですか。思春期を『ロックマンエグゼ』に捧げた私とは住む世界が違うって。だったら俺も同じゲームをしてみれば、少しは気持ちが変わるんじゃないかと思つて——ほんの少しでも、織原さんの世界を理解できるんじゃないかと思つて」

「なに、それ……？」

私のことを、知ろうとしてくれたの？

近づこうとしてくれたの？

きみを騙して傷つけた、私みたいな最低の女のために——

「織原さん」

桃田くんは言う。

緊張で少し震えた唇で——だけど、決意を秘めた眼差しで。

「俺、やっぱり織原さんのことが好きです」

「——っ」

息を呑む。心の奥底にしまい込んだはずの感情が鎌首をもたげ、固く閉ざしたはずの蓋をぶち破ろうとしてきた。

「なに言ってるの……？　ちゃんと断ったでしょ？　この話は、もう終わったよね？」

「はい。でも、諦めきれないんです」

「……バ、バカじゃないの？　付き合えるわけじゃないじゃない……私達、年が一回りも違うんだよ？」

やめて。やめてよ、桃田くん。

そんなまっすぐな目で、私を見ないで。

これ以上見つめられたら、私、もう——

「……桃田くん。落ち着いて聞いてね」

私は言う。

感情と本能を抑えつけ、理性のみでの会話を心がける。

「きみは今、変なテンションになって舞い上がってるだけなの。そんな一過性の感情で私と付き合ったりなんかしたら、絶対後悔するから。きみは私のことを、同い年の女子高生だと思っただから好きになっただけ。本当の私は、27歳の社会人。もうすぐ30になるアラサーのおばさんなんだよ？」

続ける。胸の痛みには耐えながら。

「も、もし仮に付き合っただとしても……社会人と学生じゃ、うまくいきっこない。考えも価値観も全然違うから、すれ違うだけになると思う」

痛い。胸が痛くて堪らない。想い人が私を好きだと言ってくれているのに、断る理由をあれこれ並べ立てるのは、自分で自分の心を切り刻んでいるのと同じだった。

でも、言わなきゃならない。

相手の未来のために、言わなきゃならない。

「お願い桃田くん。私なんかのために……青春を犠牲にしないで。一生に一度しかない高校生活なんだから、私なんか振り回されちゃいけない。学生のうちは、学生らしい恋愛をした方

が絶対にいいから……」

「……そう、なんですよね、たぶん」
 桃田くんは力なく笑う。

「友達にも、織原さんを追いかけるのはやめた方がいいって言われました。すっぱり忘れた方がいいって」

「でしょ。だから——」

「でも、それで俺、目が覚めたんです。気がついたんです——俺には覚悟が足りなかったって」
 桃田くんは言った。

「覚、悟……？」

「俺と織原さんと付き合うってことは……たぶん、あんまり普通のことじゃない。だから当然、反対する奴も出てくる。仲のいい友達ですら反対するんだから、見知らぬ他人からはどんな酷い偏見や誹謗中傷を受けるかもわからない……俺には、そんな『普通』を押し付けてくる世界から、あなたを守るだけの覚悟が足りなかった」

「そこまで言うのと、桃田くんは立ち上がった」。

見つめる瞳には太陽みたいな熱があって、私の心をジリジリと焦がす。

「織原さん——告白、やり直させてください」

「やり、直す……」

「こないだの告白が嘘ってわけじゃないけど……あれはやっぱり、JKの織原さんに言った言葉でした。だから今度は27歳のあなたに——本当のあなたに、好きだと言わせてください」

その瞬間、だった。

ポオ、と。

視線の先で、なにかが光った。

柔らかな橙色だいだいいろともしびの灯火が、闇やみの中で無数に浮かび上がる。

「あっ……バカッ。あいつら、まだ早いつて……」

桃田くんが焦った声でなにかを呟いたようだったけれど、私は光から目が離せない。

淡い光は砂場の方から。

無数の輝きは平面ではなく、立体的に組み上がっていた。日が暮れて暗くなっていたせいで今まで気がつかなかったけれど、砂場にになにかがある。

温かな輝きに照らし出された、少しトゲトゲしたシルエットは——

「お、お城……？」

西洋の城、のように見える。

砂場の上に、こぢんまりとしたお城が建っていた。高さは一メートルもないくらいだろう。小さな小さな、砂でできたお城。

砂上の楼閣ならぬ、砂上の砂城。

「お城、のつもりです。友達にも手伝ってもらって、織原さんが来る前に作りました。あの……あんま近づかないでくださいね。正直クオリティはアレで……このぐらいの距離から見るのが、たぶんベストなんで」

「綺麗……」

「思わず感嘆の息が漏れた。橙色の光を発しているのは、電飾かなにかだろうか。砂でできた外壁のあちこちで小さな灯りが輝き、お城の窓から漏れ出した光が夜を彩っているかのようだった。」

闇夜を背景に、優しい光に包まれた砂のお城が浮かび上がる。

幻想的で、神秘的な光景だった。

まるで夢のよう。

お伽噺の世界に、足を踏み入れたかのよう——

「よかった、喜んでもらえたみたいで」

「……うん。すごい綺麗。でも、どうし——っ」

視線を砂のお城から桃田くんへと移した瞬間、驚いて言葉を失ってしまった。

私が幻想的な光景に目を奪われていた際に。

桃田くんは——いつの間にか花束を持っていた。

真っ赤な薔薇の花束を、少し照れくさそうに抱えている。

「わっ……え、ええ？ な、なにこれなにこれ……？ ど、どういうこと？」

もうわけがわからない。

次から次へと驚きが押し寄せて、目が回ってしまいそう。

酔う。酔っ払う。

夢の世界に酔い潰れてしまう——

「織原さん、言ってたじゃないですか。告白するならもっとムードを考えろって」
言った。

確かに言った。けど。

「嘘……でしょ？」

——たとえばほら、遊園地を貸し切って、お城の前で花束持って現れるとかさ。

まさか。まさかまさか。

あんなのを真に受けたの？

苦し紛れに勢い任せで言った、諦めさせるための口実だったのに。

「……すみません。遊園地貸し切るような金はなくて……。今の俺には、こんな安上がりなお城が精一杯です」

申し訳なきように桃田くんは言う。
 「もしも織原さんが……社会に出たこともない15のガキなんか恋愛対象じゃないっていうなら諦めます。金も地位もない俺なんかと付き合って時間を無駄にしたくないっていうなら……悔しいけど、身を引きます」

でもっ、と桃田くんは一步踏み出す。

「俺の青春とか、俺の未来とか、そんなものを気にしてるなら——余計なお世話です」

「よ、余計なお世話って……私は、ただ、申し訳なくて……」

騙してしまっ、と、咬くはしてしまっ。

そのせいで、私なんかのために、桃田くんの人生を狂わせてしまうことが。

「っーか、もう手遅れですから」

まだ幼さが残る顔で、桃田くんはクシヤツと目を細めて笑う。

「俺の心は、もうとっくに狂わされちゃってますから。悪いと思ってるなら、責任とってくだ
 さう」

そして、桃田くんは膝ひざを折る。

片膝をつき、ベンチに座る私の前に跪ひざまずく。

ふわり、と。

薔薇の香りが鼻腔びじょうをくすぐった。

幻想的な輝きを宿す砂のお城を背景に、花束を抱えた男の子が私を見上げる。

一点の曇りもない、太陽のように激しい熱を秘めた瞳で——

「好きです、織原さん。本当のあなたが、27歳のあなたが、大好きです」

「桃田くん……」

ああ——ダメ。

もう、溺おぼれてしまっ。

つま先から頭の天辺てんぺんまで全部、どっぴりと夢の世界に浸ひたかってしまっ。

燃え滾たぎる太陽の熱にあぶられて、幾重いくえにも纏まとっていた理性の鎧よろいが全て溶け落ちた。抑え込
 んでいたはずの感情が、蓋ふたをこじ開けて暴れ狂う。

心を——丸裸まるはだにされてしまっ。

「俺は……王子様みたいに金も権力も持ってない。顔だっ、大して美形でもない。でも、せ
 めて心だけは、王子様であるよう努力します」

だから、と言っ。

桃田くんは跪ひざまずいたまま花束を捧げる。

「どうか俺のお姫様になってください」



姫。

ずっとこの名前が嫌いだった。

楽しんでいられたのは五歳児ぐらいまで。小学校に入ってからからは名前であまりかわれることが多かったし、地味で太って陰キャ全開だった中学・高校時代は、『こんな私のどこが姫なんだか』と鏡を見るたびに自嘲した。

社会人になってからは、仕事とゲームをやっているだけのはずなのに時間が経つのが恐ろしく早く感じて、年を重ねるたびに名前コンプレックスが強くなった。

お姫様になることを夢見る年はとくに卒業しているのに、姫という名前だけは一生背負っていかなきゃならない。

自分の名前が嫌いだった。

それなのに。それなのに。それなのに――

「……ずるい」

唇から、言葉が漏れ出す。

「ずるい、ずるいよ、桃田くん……なんで、こんな……私なんかのために……こんなことされたら、私、もう……」

制御を失った感情と共に、涙が溢れ出す。

最近、本当に泣きすぎ。

彼と出会ってからの二週間で、どれだけ涙を流したかわからない。
でも。

今溢れ出す涙は、今までのどの涙とも違っていた――

「……わかっているの？」

私は、嗚咽おんげつの混じった声で問う。

「私……27歳だよ？」

「知ってます」

「もう、おばさんだよ？」

「27歳はおばさんじゃないですよ」

「私……ほんと、全然、いい女じゃないよ？ 女子力とか底辺だよ？ ファッションの流行には疎いし、今だってコーディネットを面倒くさがって、毎日スーツで出社してるぐらいだし。休みの日は……一日引きこもってゲームしてるような女だよ？」

「問題ないです。一緒にゲームしましょう」

「料理だってさ、桃田くんにあげたのは、すごく気合い入れて作っただけだからね？ 毎日あんな頑張ってるわけじゃなくて、適当にカップラーメンで済ましたりすることも結構あるから……」

「そのぐらい気にしません」

「……桃田くん、よく私の……お、おっぱい見てるけどさ」
 「んなっ、ぐ……あ、いや、その」

「……このおっぱいだって、たぶん、もうすぐ垂れ始めちゃうよ？」

「だ、だったら垂れるまで楽しめます！ 垂れたら垂れたで、それも楽しめますから！」

「……ぶっ。あはは。なにそれ」

吹き出すように笑ってしまう。涙を拭う。

でも、いくら拭いても涙は止まらない。

この年になると、涙との付き合い方もわかってくる。ミスをして上司にしたま怒られたとき。大好きだったお爺ちゃん（じいちゃん）が亡くなったとき。そして——15歳の子をフラなきやいけないとき。悲しくて悲しくて涙が止まらなくなるけど、涙や感情をそれなりに制御する心得はある程度身につけていた。

でも——知らない。

こんなとき、どうしたらいいのかわからない。

嬉しくて嬉しくて、幸せて幸せて涙が止まらないときは、どうしたらいいの？

どうしたらいいかわからなくて、もうどうにかなってしまおう——

「……いい、の？ ほんとにほんとに、私でいいの？」

私は言う。

「アラサーでも、彼女にしてくれますか？」

「はい！」

迷わない返答が、私の胸を撃ち抜いた。

ああ——もうダメだ。もう私を覆うものはなにもない。もう私を止めるものはなにもない。枷（かぎ）も鎧（よろい）も蓋（たか）も、全部全部ドロドロに溶かされてしまった。

剥き出しの感情だけが私を突き動かす。

ゆっくりと立ち上がる。

勇気を振り絞って一歩踏み込んでくれた彼に伝えるために、私も一歩踏み出す。

少し身がかがめ、差し出された花束を手を取った。

織原姫。

会社員。趣味はゲーム。

年は……27歳。

本日、生まれて初めて恋人ができた。

一回りも年下だけど、最高に格好いい、私の王子様。

「はあーん。結局織原と付き合うのかよ。けつ。つまんねえの」

「不貞腐ふてくましれないの。めでたいことなんだから、素直に祝福しなよ」

昼休みの空き教室。

不満そうなウラに窘たじなめるように言ってから、カナは俺の方を見る。

「おめでとう、モモ。頑張ったね」

「おう」

「やれやれ。結局僕らの気遣いは、モモを止めるところか火を点けただけだったのか。まあ、なんとなくこうなる気はしてたけどね」

呆れたように苦笑し、肩をすくめる。

「カナ、ウラ。ありがとうな。全部お前らのおかげだよ」

心から礼を述べると、カナはにこやかに笑い、ウラは鼻を鳴らした。

「まったく……人をこき使いやがってよ。いい年こいて砂遊びなんかさせやがって」

「よく言うよ。お城作りを一番頑張ってたのは、ウラじゃないか。モモのためにすごく一生懸命になつてさ」

「なっ……ち、ちげーよバカ！ 僕はただ、ああいう細かい作業が好きなだけだ！ 不器用な

お前らが見てられなかっただけだ！ ほ、ほんとだからな！」

砂のお城作りは、カナとウラにも相当手伝ってもらった。ちなみに電飾は、家にあつたクリスマスツリー用のやつ。明るいときに見るとかなり残念なクオリティだったけれど、夜の世界ではいい感じになってくれて、本当によかった。

「お前ら二人がいなかったら、絶対上手うまいかなかったよ。まあ、ライトアップのタイミングはちよつと早かつたけどね」

「しよがねーだろ。暗くて合図がよく見えなかったんだよ」

「……でもねモモ。ライトアップは、あのタイミングでベストだったと思うよ。モモが計画してたように、『俺があなたに魔法をかけてあげましょう』から始まるポエム独唱の後に指パッチンでライトアップじゃ……すげえスベってたと思う」

マジか。

あれー。格好いいと思ったんだけどな。一生懸命力作のポエム考えてたのに。

「まあ、電飾のスイッチ入れた後、僕とウラはすぐ帰ったから、その後モモがただけポエミーなこと言つたかは知らないけどね」

「そうだったのか？」

「うん。告白の結果がどうなるかと……その結果は、モモと織原さん、二人だけのものにするべきだと思つたから」

「けつ。ムービーでも撮ってやろうかと思っただけど、仕方ねえから自重じちやうしてやったぜ」
 「……ほんと、サンキューな」

つくづく友人に恵まれてるな、俺は。
 こいつらが友達で、本当によかった。

「いやあ、それにしても、なんか凄まじい大恋愛を脇から眺めてた気分だったけど、モモと織原さんって、まだ出会って二週間も経すぎってないんだよね」

カナが皮肉めいた笑みを浮かべて言う。
 「まるでロミオとジュリエットだ。禁断の恋ってところもそっくりだしね」
 「……うるせえ」

返す言葉もなかった。

そうか。まだ、あの日から——電車でJKコスをした織原さんに遭遇してから、まだ二週間しか経ってなかったのか。ずいぶんと長い間片思いをしていたような気分だったけれど、俺達はまだ、会ってから一月も経っていない。

昔、ロミジュリが全体を通して二週間ちよいで終わる話だと知ったときは、なんだそりやと思っただけれど……やれやれ。俺はもう、ロミオとジュリエットはバカにできないな。

恋愛に過ごした時間は関係ないのだと、つくづく思い知った。

「……ねえ。モモ」

ふと、カナが真面目まじめな顔をして言う。

「やつとの思いで好きな人と付き合えて、今は舞い上がってると思うけどさ……本当に大変なのは、たぶんこれからだよ」

「……………」

「現実の恋愛なんて、エビログの方が長いんだから」

「わかってるよ」
 交際がゴールというわけじゃない。

ラブコメみたいに二人が付き合ったら時間が飛んで結婚エンドで最終回、なんてこともないし、お伽噺おとぎばなしみたいに『そして二人はいつまでも幸せに暮らしました』みたいな締め文句でも終われない。

これからだ。
 これから、全てが始まる。

15歳と27歳が付き合うのは、きつと普通のことじゃない。これから先、俺達にどんな困難が押し寄せるかは想像もつかない。覚悟はしたつもりだけど、俺のようなガキの覚悟なんて、もしかしたらなんの意味もないのかもしれない。

でも。

それでも。

今だけは——素直に喜びたい。
ひたすらに浮かれていた。

好きな人と両想いになったという、そんな奇跡に酔い痴れて——
ふと、窓の外を見やる。

向こうには、織原さんが勤める会社がある。

今頃、あつちも昼食を食べてる頃だろうか。今日はどんなお弁当を作ったのだろう。それともまた、友人の雪さんと一緒にランチを楽しんだりしてるのだろうか。

そんなことを考えながら、俺はポケットからスマホを取り出し——カバーを外した。



「織原さん……さつきからなに、ニヤニヤしてるんですか？」

会社の休憩スペースでお弁当を食べていたら、通りかかった小松さんから、ちよつと引いたような顔で声をかけられた。

「えっ。わ、私、そんなニヤニヤしてたっ？」

「はい、かなり」

「そ、そう……」

「スマホのカバーをじつと見つめたりして……なにがそんなに面白いんですか？」

「べ、べべ、別になんでもないよっ！ ただ、いいカバーだなあ、と思っただけ」

我ながら誤魔化すのが下手過ぎだった。小松さんは不思議そうな顔をしていただけれど、深く追求することはなく、飲み物を買って去っていった。

「はあ……」

深く溜息。しまったなあ。もつとしつかりしなきゃ。

私と桃田くんの関係は、周囲には隠さなきゃならない。15歳の高校生と付き合い合ってるなんてことが明るみになったら、社会人としてどれだけの響響ひびひびを買うかわからないし——なにより、桃田くんにも迷惑をかけてしまう。

両想いになれたけれど、こっそりと隠れて付き合わなければならぬ。

浮かれて周囲に隙を見せてはいけない。

でも。

でもでも——

「……えへへ」

さすがに付き合った翌日じゃ、どうしようもなく浮かれてしまう。朝から何度、スマホのカバーを外して眺めたかわからない。

カバーの内側、スマホと接する部分には——プリクラが貼はってある。

桃田くんと、JKの格好をした私の、ツーショット。

私が落としていったのをずっと取っておいたくれたらしく、昨日、それをお互いのスマホケースの内側に貼った。表からは見えない部分だけど、こっそりと隠れて『おそろい』の事をやってる感じが……ラブラブっぽくてすごくいい。すっごく幸せ。

……なんだか中学生みたいで恥ずかしいけど、でもしょうがない。

生まれて初めて恋をして、生まれて初めて彼氏ができた私は、恋愛偏差値なんて中学生とにも変わらないのだから。

桃田薫くん。

一回りも年下の、私の彼氏。

カバー裏にプリクラを貼ることを提案したときに、

「私が学生の頃は、携帯の充電のカバー裏に彼氏のプリクラを貼ってる子が結構いたなあ。桃田くんはどうだった？」

「……すみません。俺、ガラケー使ったことなくて」

「……さ、最初からスマホ世代……!?!」

とか、そんな絶望を味わってしまったぐらい、違う世界に住む私達だけ——それでも彼は、世界や常識の垣根を超えて、私の心を驚嘆わしづかみにした。

これから先、なにが起こるかはわからないけれど、今はただこの奇跡を噛み締めていたい。

ふと、窓の外を見る。

向こうには、桃田くんが通う学校がある。

今日はどんな昼食を食べてるのかな。友達のウラくんやカナくと一緒かな。今度私がお弁当を作ってあげようかな。

そんなことを考えながら、彼も私のことを考えてくれたら嬉しいな、とそう思った。